

(財)大阪府文化財センター調査報告書 第141集

太秦遺跡・太秦古墳群Ⅲ

寝屋川市

太秦遺跡・太秦古墳群Ⅲ

一般国道168号（枚方大和高田線、天の川磐船線）他
道路整備事業に係る上の山遺跡他埋蔵文化財発掘調査報告書

二〇〇六年三月

財団法人 大阪府文化財センター

2006年3月

財団法人 大阪府文化財センター

(財)大阪府文化財センター調査報告書 第141集

寝屋川市

太秦遺跡・太秦古墳群Ⅲ

一般国道168号（枚方大和高田線、天の川磐船線）他

道路整備事業に係る上の山遺跡他埋蔵文化財発掘調査報告書

財団法人 大阪府文化財センター

序 文

京都と大阪をつなぐ第二京阪道路の建設も本格化し、北河内が新しい時代を迎えようとしています。それに伴い、第二京阪道路及び測道に取り付き、道路網を形作る府道や市道の整備も急がれる状況になってきたようです。すでに昨年度来、当センターでは府道建設に先立つ発掘調査を実施しています。交差する道路調査は、遺構の面的な拡がりを確認するうえでも重要なものです。

本書は、昨年度に引き続いて実施した大阪府都市計画道路である国守黒原線建設に先立つ太秦遺跡・太秦古墳群の報告書です。調査箇所は第二京阪道路の北側にあたり、昨年度の調査で検出した古墳と弥生時代の竪穴住居の連続を確認しようとするものでした。調査の結果は当然のこととは言え、北側で古墳周溝の続きを検出し、古墳の規模をほぼ確定させることができました。さらに、北に下る緩斜面で弥生時代の竪穴住居を始め、多数の遺構を発見したことは予想外の成果を言えましょう。200㎡余りの小面積の調査でしたが、大きな展望へのきっかけになるものと思っております。

調査の実施にあたりましては、大阪府枚方土木事務所、寝屋川市役所関係部局には多大なご配慮を賜りました。厚く御礼申し上げます。そして、2年にわたり夏の暑い時期にご迷惑をおかけいたしましたにもかかわらず、ご理解及びご支援をいただきました地元国守町自治会と太秦自治会の方々、とりわけ近隣の皆様には感謝の念に耐えません。心より御礼申し上げます。

2006年3月

財団法人 大阪府文化財センター
理事長 水野正好

例 言

1. 本書は大阪府寝屋川市太秦及び国守町に所在する太秦遺跡・太秦古墳群の発掘調査報告書である。
2. 調査は大阪府枚方土木事務所から財団法人大阪府文化財センターが一般国道 168号（枚方大和高田線、天の川磐船線）他道路整備事業に係る上の山遺跡他発掘調査として平成17（2005）年7月1日～平成18（2006）年3月31日までの間委託を受け、平成17（2005）年7月22日～平成17（2005）年10月31日まで発掘調査を実施した。調査と並行して遺物整理作業を行い、平成18（2006）年3月31日、本書の刊行を以って完了した。

3. 本調査に係る体制は次のとおりである。

調査部長 赤木克視、京阪調査事務所所長 山本彰、調査第一係長 宮野淳一、主査 大樂康宏、主査 上野貞子〔写真〕、専門調査員 六辻彩香、調整課課長 田中和弘、係長 芝野圭之助、主査 山上弘、技師 信田真美世

4. 現地調査、報告書作成にあたり次の緒機関、諸氏の指導と協力を得た。記して謝意を示す。

大阪府教育委員会、大阪府枚方土木事務所、あさひ丘・太秦・国守町の各自治会の方々
志田浩一、鈴木孝治、瀬田由紀子、出口陽子、松浦暢久（敬称略、順不同）

本書の作成・編集は大樂の指導の下、六辻が行った。なお、石器に関しては 宮野淳一、縄文土器に関しては南部調査事務所嘱託 永野仁による。また、出土遺物は当センター職員より全般にわたって教示を得た。

5. 本調査に係わる出土遺物及び記録類は、当センターにおいて保管している。広く利用されることを希望する。

凡 例

1. 遺構実測図の基準高は東京湾平均海水位（T.P.）を用いた。
2. 遺構平面図の座標数値は世界測地系（測地成果2000）の座標系VI系で表記している。
3. 平面図で示す方位はすべて座標北を示している。
4. 現地調査、整理作業、記録方法は財団法人大阪府文化財センター『遺跡調査基本マニュアル【暫定版】』（2003年8月）に準拠して行った。
5. 土色の表記は小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖』（第25版2003年版 農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修）に準拠した。
6. 遺構番号は種類に関わらず検出順に付与し「番号－遺構種類」の記載方法をとった。なお、住居などの複数遺構の集合体は遺構種類ごと別途に遺構番号を設定し「遺構種類－番号」と記載した。
7. 遺構平面図・断面図の縮尺は 100分の1・40分の1、土層断面図は40分の1である。実測遺物は土器・土製品が3分の1、石器が3分の2である。図ごとにスケールを表示している。
8. 須恵器のみ断面を黒く塗りつぶした。
9. 写真は石器のみ実寸である。

目 次

序文

例言

凡例

第1章 調査の経緯と経過	1
第1節 調査の経緯	1
第2節 発掘調査の経過	2
第3節 整理作業の経過	2
第2章 位置と環境	3
第1節 地理的環境	3
第2節 歴史的環境	3
第3章 調査の方法と成果	5
第1節 調査の方法	5
第2節 遺構	7
第3節 遺物	23
第4章 総括	29

報告書抄録

挿 図 目 次

図 1	都市計画道路国守黒原線路線図	1
図 2	調査地位置図	3
図 3	調査区と周辺の遺跡	4
図 4	調査区配置図	5
図 5	地区割り図	6
図 6	調査区東壁 断面図	8
図 7	調査区Y=-32760セクション 断面図	9
図 8	1区 5溝 断面図	10
図 9	1区 第1遺構面	11
図10	1区 第2・第3遺構面	12
図11	1区 6土坑 平面図・断面図	13
図12	1区 8溝 断面図	14
図13	1区 古墳2（149溝） 平面図	14
図14	1区 古墳2（149溝） 断面図	15
図15	1区 7土坑 平面図	15
図16	1区 7土坑 断面図	16
図17	1区 9土坑 平面図	16
図18	1区 9土坑 断面図	17
図19	1区 153土坑 平面図	17
図20	1区 153土坑 断面図	18
図21	1区 竪穴住居1 断面図	18
図22	1区 竪穴住居1 平面図	19
図23	2区 調査区北東壁 断面図	20
図24	2区 第1遺構面	21
図25	2区 第2遺構面	22
図26	1区 包含層 出土遺物（1）	23
図27	1区 包含層 出土遺物（2）	23
図28	1区 古墳2（149溝） 出土遺物	24
図29	1区 9土坑 出土遺物	24
図30	1区 153土坑 出土遺物（1）	24
図31	1区 153土坑 出土遺物（2）	25
図32	2区 包含層 出土遺物	26
図33	1区 包含層 出土石器	27
図34	1区 遺構 出土石器	28

写真図版

写真図版1 1. 調査地周辺航空写真（南西から） 2. 調査区航空写真（南東から）

写真図版2 垂直写真 上 1区・下 2区

写真図版3 1. 1区 第2・第3遺構面全景（東半） 2. 1区 第2・第3遺構面全景（西半）

写真図版4 1. 1区 8溝・149溝（古墳2）・竪穴住居1・9土坑・153土坑
2. 1区 7土坑（南東から） 3. 1区 153土坑上層（南西から）
4. 1区 153土坑断面（西から） 5. 1区 153土坑完掘状況（南西から）

写真図版5 1. 2区 第2遺構面全景（北西から） 2. 2区 第2遺構面全景（南西から）

写真図版6 1. 1区 第1遺構面土手状遺構（東から）
2. 2区 第1遺構面土手状遺構（東から）

写真図版7 1区 包含層・149溝（古墳2） 出土遺物

写真図版8 1. 1区 7土坑 出土遺物 2. 1区 9土坑 出土遺物（1）

写真図版9 1. 1区 9土坑 出土遺物（2） 2. 1区 153土坑 出土遺物（1）

写真図版10 1区 153土坑 出土遺物（2）

写真図版11 2区 包含層 出土遺物

写真図版12 1区 包含層 出土石器

写真図版13 1. 1区 遺構 出土石器 2. 1区 9土坑 出土焼土塊

第1章 調査の経緯と経過

第1節 調査の経緯

大阪府により主要地方道枚方富田林泉佐野線（都市計画道路国守黒原線）改良工事として現在進められている寝屋川市梅が丘2丁目から同太秦までの道路建設区間の内大阪府枚方土木事務所の依頼を受けて大阪府教育委員会文化財保護課が取得された建設用地を対象とし事前の試掘調査を平成15（2003）年9月1日～同9月10日に実施した。その結果、計画路線の一部で遺物包含層が検出され、遺物包含層を除去した面においては弥生時代の溝・ピットが検出された。このことにより発掘調査が必要と判断され、周知の遺跡の範囲外であったため範囲の拡大がなされることとなった。

その後、平成16（2004）年4月28日～同8月20日に財団法人大阪府文化財センターが発掘調査を実施した。弥生時代の竪穴住居や方形周溝墓、古墳時代中期の方墳あるいは円墳等 600以上にのぼる遺構を検出している。その成果は『太秦遺跡・太秦古墳群Ⅰ』・財団法人大阪府文化財センターとしてすでに報告している。

この時の調査で検出された古墳周溝の続き等が調査範囲外にさらに拡がることが確認されたため、さらに今回調査地・太秦遺跡（太秦古墳群・その5）として調査を行うこととなった。なお、調査地は現在周知の太秦遺跡・太秦古墳群の範囲内である。

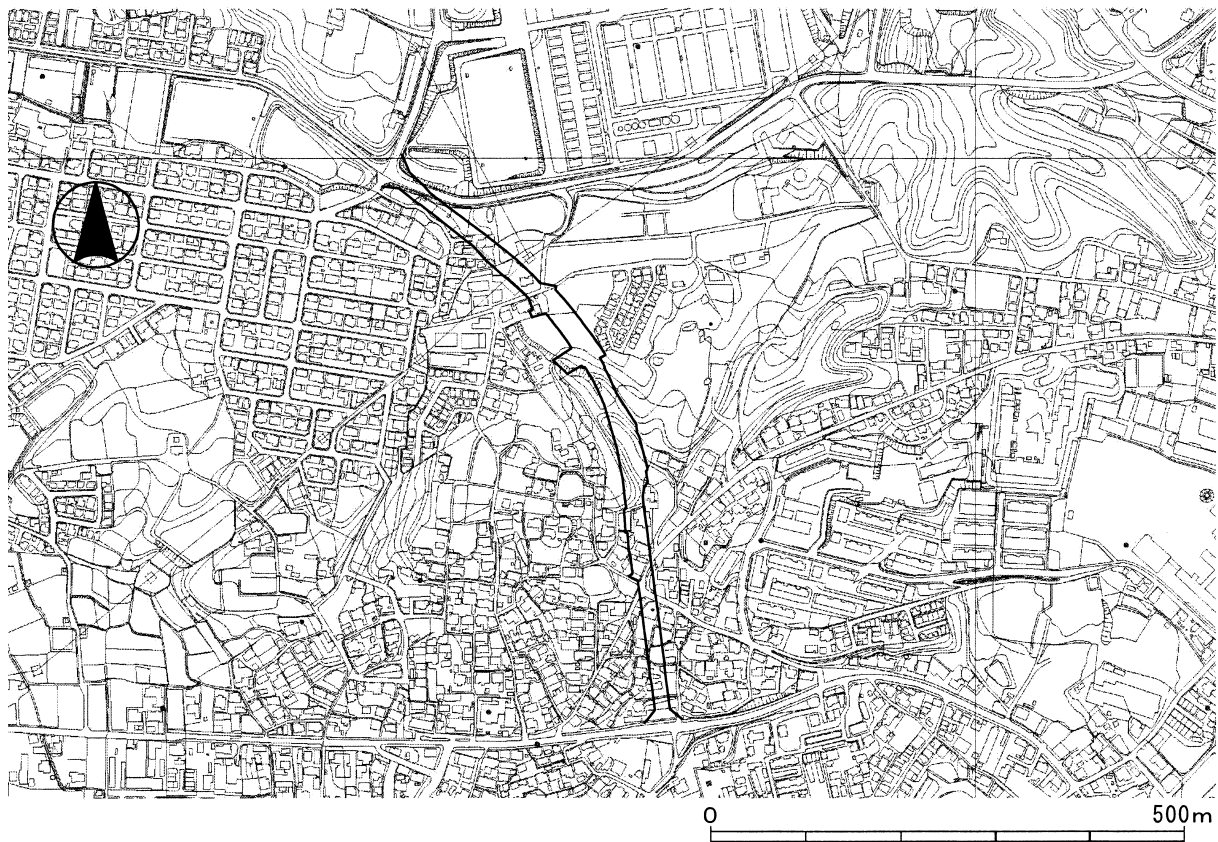


図1 都市計画道路国守黒原線路線図

第2節 発掘調査の経過

発掘調査は大阪府教育委員会の指示を受け、大阪府枚方土木事務所からの委託により財団法人大阪府文化財センターが実施した。大阪府教育委員会文化財保護課の指導の下、現地での調査は平成17（2005）年7月22日に開始し平成17（2005）年10月31日に終了した。

発掘調査は財団法人大阪府文化財センター京阪調査事務所調査第一係、係長宮野淳一・主査大樂康宏・専門調査員六辻彩香が担当した。現地調査は大樂の指導の下、主に六辻があたった。

現地調査は工事請負方式により掘削作業等を京阪工業株式会社に発注し、また、写真測量は株式会社かんこうに委託した。その他、理化学的分析等の委託は行っていない。

発掘作業は現況測量が終了した後、盛土・旧耕土を機械力により除去し、人力により遺構・遺物の精査を行った。その後、再度部分的に機械力による掘削が必要と判断され、整地土・堆積層を除去し、さらに人力により包含層の掘削、遺構面・遺構の精査を行った。

検出した遺構面は航空機による写真測量により遺構平面図を作成し、また、土層断面図等の作成、記録写真の撮影も併せて行った。現地の調査・記録方法は財団法人大阪府文化財センターの『遺跡調査基本マニュアル【暫定版】』に準拠して行った。調査終了後は掘削土によってすべて埋戻し原状に復した。

第3節 整理作業の経過

現地での調査が終了した後、ただちに今回調査で出土した遺物等の整理作業を行った。整理作業も現地調査の担当者が併せて担当した。

整理作業は遺物洗浄を一部現地調査詰所で行ったが、現地撤収後財団法人大阪府文化財センター京阪調査事務所で洗浄・注記・登録・接合・実測・製図等を行った。現地で作成した図面、写真等の整理・記録も併せて行った。

遺物写真撮影等は当センター京阪調査事務所、主査上野貞子が担当した。

遺物実測・保存処理等の委託は行っていない。

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境

太秦遺跡・太秦古墳群は大阪府の東北部、寝屋川市太秦・国守町・打上に所在する。

寝屋川市域の西部には旧河内潟の沖積地化により形成された標高2～3mの平野、東部には生駒山地西麓から派生して西方向に連なる50m前後の丘陵地帯が広がる。寝屋川市東部丘陵地帯に北を打上川、南を讃良川に挟まれた比較的面積の広い標高50m弱の台地状の丘陵が存在する。この丘陵一帯に太秦遺跡・太秦古墳群は立地している。丘陵の頂部平坦面が太秦遺跡・太秦古墳群の現在周知されている遺跡範囲とほぼ重なる。今回調査地の南西側緩斜面には大尾遺跡や高宮遺跡が隣接して立地している。

今回調査地は丘陵頂上平坦部の南端付近に位置している。南西に向かって頂部平坦面から丘陵緩斜面を経て沖積地への地形の変化をみる事ができる。現地目は宅地で、調査範囲中央の市道上でT.P.+48.2mを測る。

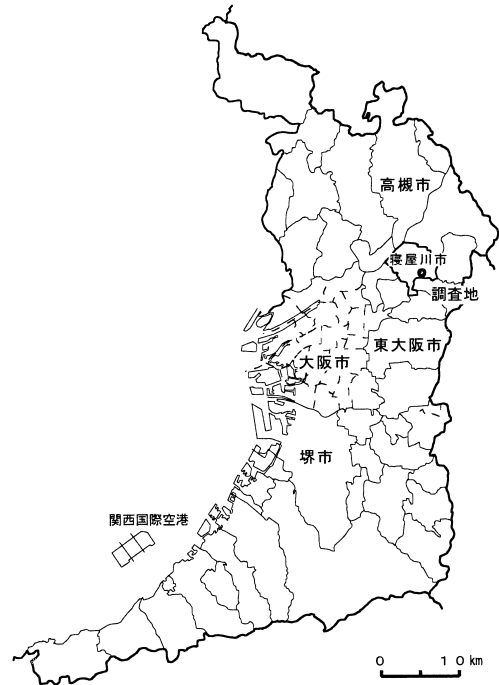


図2 調査地位置図

第2節 歴史的環境

太秦遺跡・太秦古墳群の周辺には旧石器から古代までの各時代の遺跡が分布する。太秦遺跡が立地する枚方丘陵周辺では多くの旧石器時代の遺跡があげられる。本遺跡やさらに南に立地する寝屋川市讃良川遺跡・高宮遺跡・伝寝屋長者屋敷跡遺跡で国府型ナイフ形石器が出土している。

縄文時代の遺跡としては、本遺跡よりやや離れるが早期の交野市神宮寺遺跡、枚方市穂谷遺跡、四條畷市田原遺跡があり、前期では高宮遺跡、中期以降では讃良川遺跡や四條畷市砂遺跡などの遺跡が存在する。寝屋川市小路遺跡では前期から後期の遺物が確認されている。高宮遺跡では土坑などが検出され、北白川下層式、大歳山式土器が出土する。また、讃良川遺跡では貯蔵穴が検出され、船元式土器が出土している。

弥生時代前期の遺跡には寝屋川市高宮八丁遺跡、四條畷市雁屋遺跡・田原遺跡をあげることができる。高宮八丁遺跡はこの時期の北河内を代表する集落跡で溝や土坑等を検出している。中期には集落は廃絶し、太秦遺跡と関連づけて考えられている。弥生時代中期には寝屋川市大尾遺跡・寝屋川市太秦遺跡をあげることができる。特に太秦遺跡がこの地域の中心的な位置を占めていたと考えられる。また、弥生時代後期では遺跡数が増えるが集落として確かな遺跡は太秦遺跡から距離を置く枚方丘陵一帯に多く存

在している。後期では讃良郡条里遺跡で後期末から古墳時代前期初頭と考えられる集落が検出されている。

太秦遺跡は弥生土器や石槍・石鏃が採集され、北河内を代表する弥生時代の遺跡として早くから知られていた。広範囲かつ高地に立地することからも考古学上で著名な遺跡であるにも関わらず、遺跡の様相については不明な点が多い。

この太秦遺跡・太秦古墳群の南端をかすめるように第二京阪道路建設及び大阪北道路建設が計画され、当センターが平成13（2001）年度から平成16（2004）年度にわたり、太秦遺跡・太秦古墳群の本調査を行った。平成15（2003）年度に実施した調査では、弥生時代中期の竪穴住居34棟や周溝墓1基をはじめ多くの遺構を検出している。また、近年の調査で新たに大尾遺跡の存在が明らかとなった。大尾遺跡では中期の方形周溝墓が30基以上、竪穴住居などが検出されており、太秦遺跡の墓域であった可能性が考えられる。

太秦古墳群も早くから甲冑形埴輪・須恵器などの採集遺物より、古墳時代後期を中心とした群集墳としてその存在が知られていた。しかし、昭和40年頃から大阪市水道局の浄水場などの開発によって消失し、太秦高塚古墳（トノ山古墳）を除き墳形をとどめるものはなく数基が記録あるいは小字により知られるのみである。太秦中町遺跡では古墳の周濠が検出され、円筒埴輪の他に鳥などの形象埴輪が出土している。太秦高塚古墳は寝屋川市の指定史跡として整備・復元を行うのに先だち発掘調査が行われた。その結果、直径約37m・高さ7mの造出の区画が伴う円墳であることがわかった。主体部は木棺直葬である。円筒埴輪の他、造出の区画では人物・水鳥・鶏や器財埴輪、主体部では副葬品として短甲・鉄鏃・鉄斧が出土している。また、当センターが実施した第二京阪道路建設に係る発掘調査で平成13（2001）年度に13基の古墳が検出され「尾支群」と命名された。平成15（2003）年度にはさらに12基の古墳が検出された。これにより太秦古墳群の様相の一部が判明した。

太秦古墳群周辺古墳として前期では四條畷市忍岡古墳、交野市森古墳群や枚方市藤田山古墳、中期では枚方市禁野車塚古墳がみられる。後期以降では寝屋川市打上古墳群や石の宝殿古墳がみられる。石宝殿古墳は横口式石槨をもつ終末期古墳である。平成15（2003）年度には横穴式石室を主体部にもつ奥山1号墳の調査が実施されている。また、寝屋川市打上古墳群には『河内名所図会』で「八十塚」と紹介されるほど塚があったとされるが、現在は石材が散布する程度である。生駒山西麓から枚方丘陵にかけて数々の古墳が築かれていたと思われる。

また、飛鳥時代以降になると太秦遺跡に隣接する高宮遺跡、大尾遺跡、寝屋川市寝屋東遺跡などがあげられる。高宮遺跡では大型総柱掘立柱建物が東西方向に軸をそろえて5棟検出された。他に掘立柱建物が検出されており、寝屋川市高宮廃寺との関連がうかがえる。隣接する大尾遺跡では掘立柱建物が38棟検出されており、高宮遺跡との密接な関係がうかがえる。

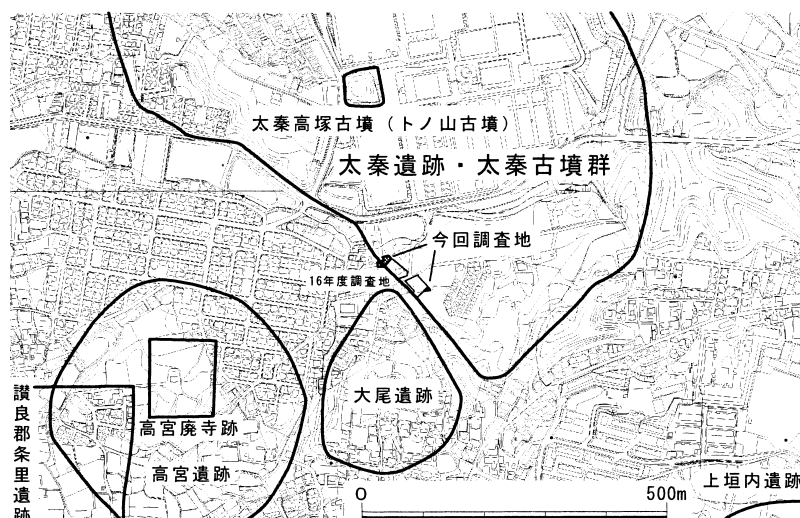


図3 調査区と周辺の遺跡

第3章 調査の方法と成果

第1節 調査の方法

今回の調査は、試掘調査を実施した大阪府教育委員会により発掘調査が必要と判断され、財団法人大阪府文化財センターが大阪府教育委員会の指示を受け平成16年に行った調査区の続きを調査した。調査区は大阪府教育委員会から指示を受けた範囲の内、実際の計画道路幅員・形状に合わせ調査区を設定した。調査区が離れていたため、平成16年と同様に、2調査区とし、北西側を1区・南東側を2区と呼称して調査を実施した。調査面積は1区が204㎡、2区が16㎡、合計220㎡である。

調査を進めるにあたっては、財団法人大阪府文化財センター「遺跡調査基本マニュアル【暫定版】」(2003年8月)に準拠し、遺物登録、遺構登録、遺構実測図登録、地区割りを行った。

調査地区の地区割りは、出土遺物の取り上げ単位、土層観察セクションの設定、遺構実測図、撮影記録などの位置記録に用いた。

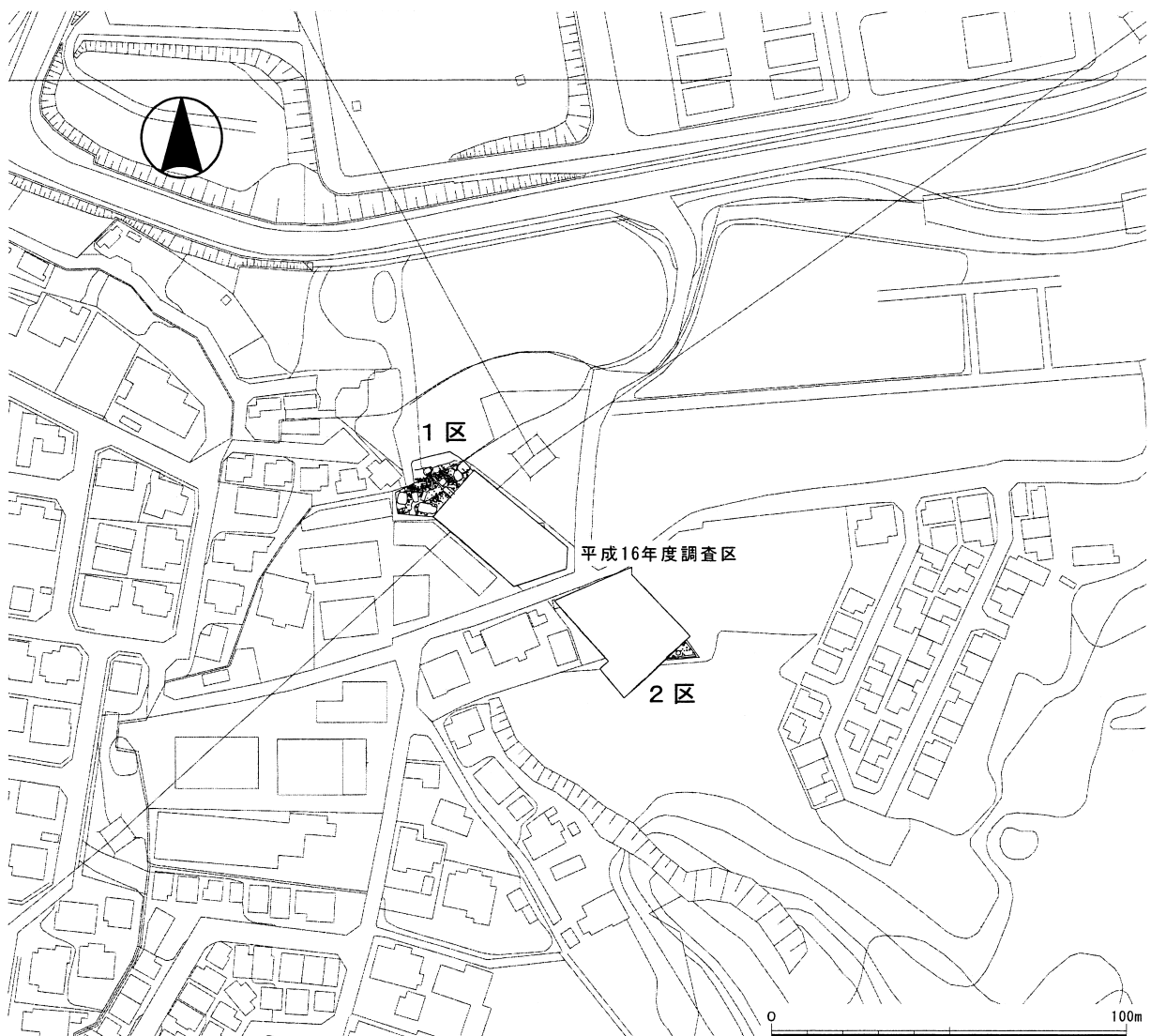


図4 調査区配置図

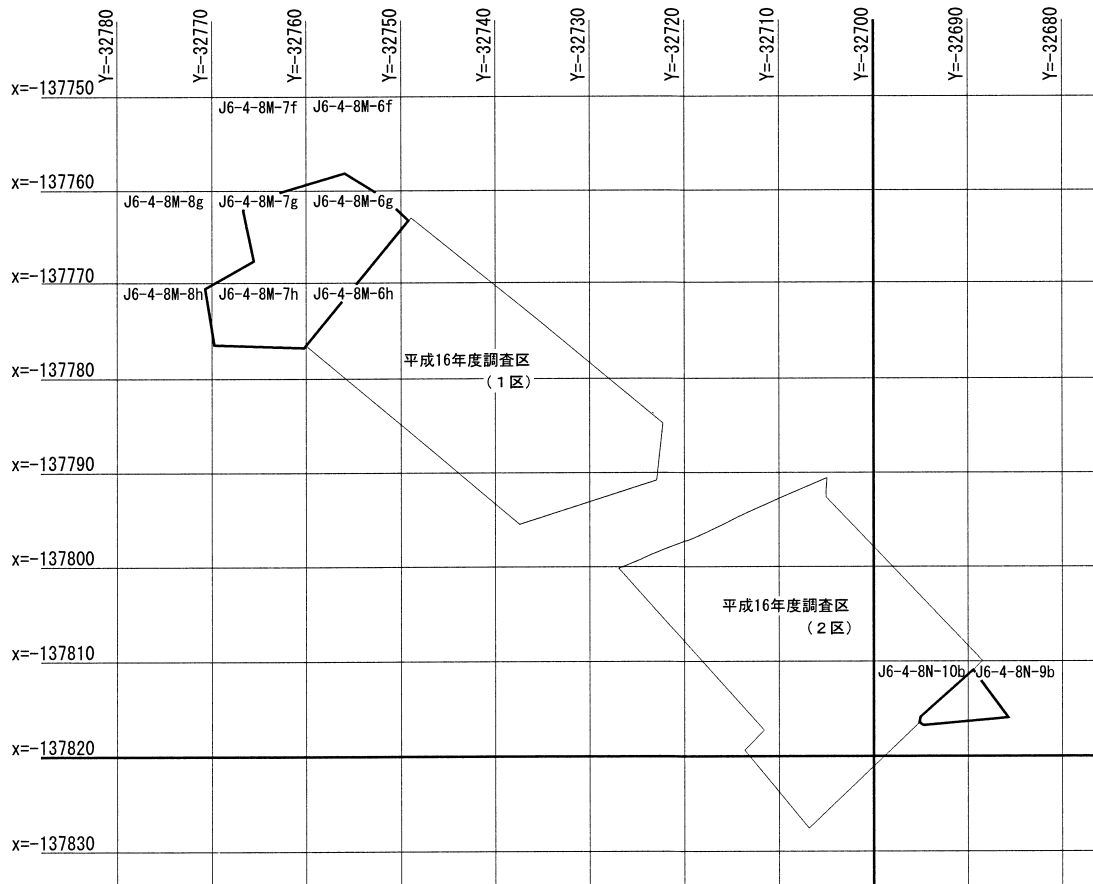


図5 地区割り図

地区割りは次のとおり行った。

基準線に関しては当センターで現在、地区割りをを行う際に世界測地系（測地成果2000）を使用し、区割りは次の大から小への6段階で行った（図5）。

第Ⅰ区画：大阪府の南西端 $X = -192000$ ・ $Y = -88000$ を基準とした南北6km、東西8kmの区画である。表示は南北をA～O、東西を0～8とし、南北、東西の順に表示する。

第Ⅱ区画：第Ⅰ区画内を南北1.5km、東西2.0kmでそれぞれ4分割し、計16区画を設定する。南西端を1とし、東へ4まで、あとは西端を5、9、13、北東端を16とする平行式の地区名を表示する。

第Ⅲ区画：第Ⅱ区画内を100m単位で縦15、横20。表示は北東端を基点に南北A～O、東西を1～20とし、横、縦の順に表示する。

第Ⅳ区画：第Ⅲ区画内を10m単位で区画する。縦、横各10。表示方法は北東端を基点に南北a～j、東西1～10とし、横、縦の順に表示する。

第Ⅴ区画：第Ⅳ区画内を5m単位で区画する。縦、横各2。北東側Ⅰ、北西側Ⅱ、南東側Ⅲ、南西側Ⅳと表示する。

第Ⅵ区画：第Ⅳ区画の北東端を基点とし、西へはW+○m○cm○mmと必要な桁まで表示する。

通常、遺物の取り上げなど調査で使用する最低範囲は第Ⅳ区画までとし、必要に応じ下位の範囲を使用した。ラベル記入などは、第Ⅲ区画、第Ⅳ区画を表示することを原則とした。

第2節 遺構

1区では3遺構面を検出した（第1遺構面～第3遺構面）。2区では2遺構面を検出した（第1遺構面・第2遺構面）。

1区第1遺構面は近世以降の遺構面、第2遺構面は古墳時代以降の遺構面、第3遺構面は弥生時代の遺構面を検出した。2区第1遺構面は近世以降の遺構面、第2遺構面は弥生時代の遺構面を検出した。

1区第1遺構面では土手状遺構・土坑・溝を検出した。1区第2遺構面では方墳の周溝・方墳または円墳と考えられる周溝・溝を検出した。1区第3遺構面ではけっして広くない面積にもかかわらず、弥生時代中期の竪穴住居・土坑・多数のピットを検出した。

2区第1遺構面では土手状遺構・溝を検出した。2区第2遺構面では平成16年度に検出された弥生時代中期の竪穴住居に伴うと考えられるピットを検出した。

遺構数は1区で369、2区で19、遺構総数は388を数える。各地区とも弥生時代の遺構が大部分を占めている。

1区

層序（図6・7）

今回の調査地は丘陵頂部平坦面に当たり、耕作等の削平による地形の改変もかなり行われている。このため、遺跡の本来の層序はほとんど遺されていない。また、調査地の調査直前の地目は宅地で、全面に盛土が施されている。北側では谷が埋め立てられ調査区と同一面となっている。

基本層序は盛土、旧耕土、灰オリーブ色砂質土、整地土、包含層、にぶい黄褐色（10YR4/3）砂質土層、明褐色粘土（地山）の順である。

盛土は全面に施され、0.2m～0.6mの厚さを測る。近年の施工であると思われる。

旧耕土は宅地化以前に耕作地であったことを示し、おそらく畑作が行われていたと考えられる。盛土施工時に削平されたと考えられ、厚さ0.2m程度部分的に残存する。弥生土器・石錐・土師器・瓦器・陶器の細片が出土する。

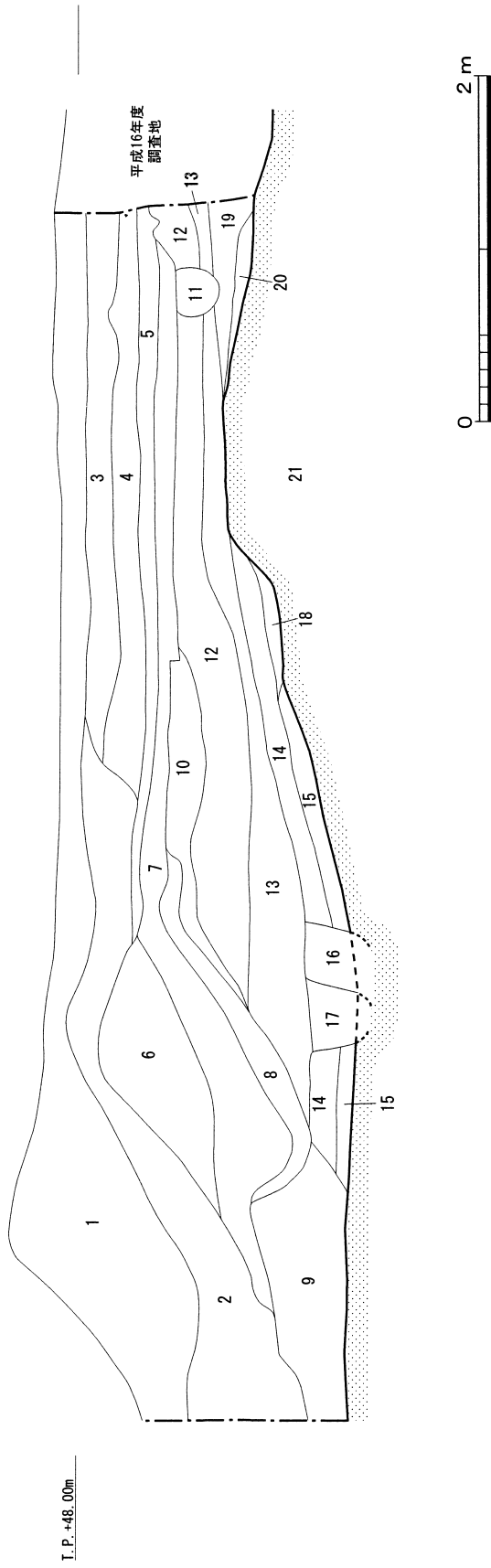
灰オリーブ色砂質土は1区南側で部分的に0.2m程度確認できる。締まりはあまり良くない。旧耕土の直下層で、近世以前の耕作土であると思われる。この層からは平成16年度の調査で弥生土器・サヌカイト片・須恵器・土師器・瓦器・陶器の細片が出土する。

整地土は0.2m～0.6mの厚さである。土色・土質ともに地山と類似し、全域で見られる。旧耕土と同様近世以前の施工であると思われる。この層からは弥生土器細片・磁器・陶器・瓦が出土する。

包含層はにぶい黄褐色（10YR5/3）砂質土、黄褐色（10YR5/6）砂質土、褐色（10YR4/4）粘質土の順に堆積している。にぶい黄褐色（10YR5/3）砂質土では弥生土器・石包丁・石錐・石鏃・石小刀・サヌカイト剥片が出土する。褐色（10YR4/4）粘質土では弥生土器・須恵器・石槍・サヌカイト剥片が出土している。調査区東から西に緩やかな斜面となっているため、平坦面から流れ込み堆積した層である。

包含層と地山の間層としてにぶい黄褐色（10YR4/3）砂質土が調査区中央で見られる。この層では弥生土器・石鏃が出土する。

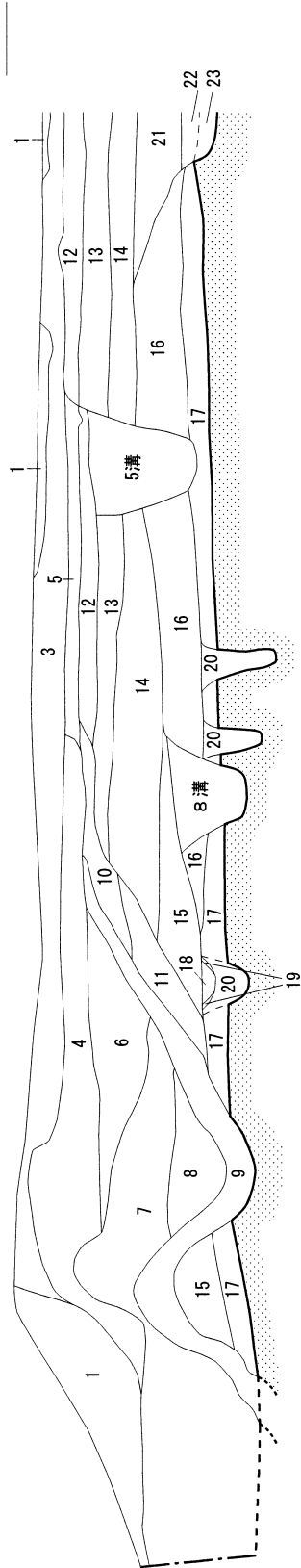
地山は南側に強い粘性を持つ明黄褐色粘土層である。また、1区北側の斜面では下層で認められる礫層の明黄褐色砂礫土層が露呈する。



- 1 表土
- 2 攪乱
- 3 盛土
- 4 旧耕土
- 5 灰オリーブ色 7.5Y6/2 砂質土
- 6 明黄褐色 10YR6/8 粘質土
- 7 褐色 10YR4/6 粘土 (橙色 7.5YR6/8 粘土を含む)
- 8 黄褐色 2.5Y5/4 砂質土
- 9 にぶい黄色 2.5Y6/4 砂質土
- 10 にぶい黄褐色 10YR5/4 砂質土
- 11 褐色 7.5YR4/3 粘質土・5溝
- 12 にぶい黄褐色 10YR5/3 砂質土
- 13 にぶい黄褐色 10YR4/3 粘質土
- 14 黄褐色 10YR5/6 砂質土 (0.05cm~2cm 大の礫を含む)
- 15 褐色 10YR4/4 粘質土 (0.05cm~1cm 大の礫を含む)
- 16 暗褐色 10YR3/4 粘質土 (0.02cm~0.05cm の礫を含む、遺物を含む)
- 17 暗褐色 10YR3/4 粘質土 (0.02cm~0.05cm の礫を含む)
- 18 褐色 10YR4/6 粘質土
- 19 褐色 10YR4/4 粘質土
- 20 黄褐色 10YR5/6 粘質土 (褐色 10YR4/4 粘質土ブロックを含む)
- 21 明黄褐色 10YR7/6 砂礫土 (0.05cm~2cm 大の礫を含む)・地山

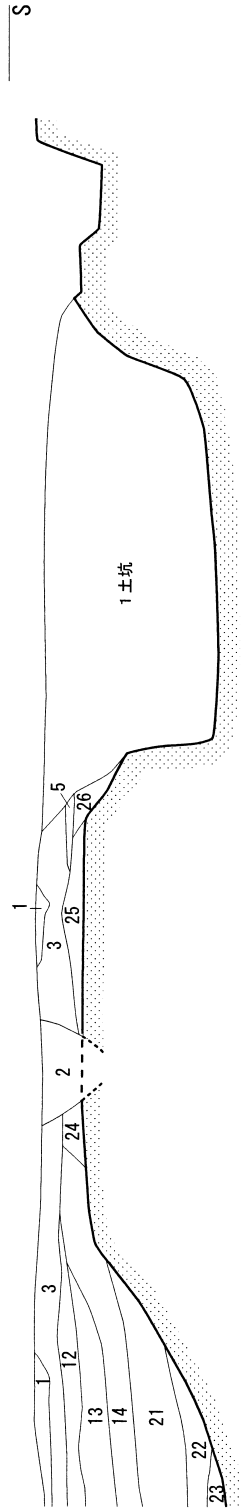
図6 調査区東壁 断面図

I.P.+48.00m
N



X=-1377701 line
との交点

I.P.+48.00m



- 1 盛土 2 攪乱 3 旧耕土 4 褐色 10YR4/6 粘土 (橙色 7.5YR6/8 粘土を含む) 5 灰オリーブ色 7.5Y6/2 砂質土
- 6 褐色 10YR4/4 砂質土 (明黄褐色 10YR6/8 粒を含む) 7 褐色 10YR4/6 砂質土 (黄褐色 10YR5/6 粒を含む)
- 8 褐色 10YR4/4 砂質土 (明褐色 7.5YR5/8 粒を含む) 9 オリーブ褐色 2.5Y4/4 粘質土 10 にぶい黄褐色 10YR5/4 砂質土
- 11 褐色 10YR4/6 砂質土 (2cm 大の地山ブロック、0.5cm~1.5cm 大の礫を含む) 12 にぶい黄褐色 10YR5/4 砂質土
- 13 にぶい黄褐色 10YR5/3 砂質土 14 黄褐色 10YR5/6 砂質土 15 褐色 10YR4/4 粘質土 16 にぶい黄褐色 10YR4/3 砂質土
- 17 明黄褐色 10YR6/8 粘質土 (5cm 大の地山ブロックを含む) 18 褐色 10YR4/4 粘質土 19 黄褐色 10YR5/6 粘質土
- 20 灰黄褐色 10YR4/2 砂質土 21 褐色 10YR4/4 粘質土 22 黒褐色 10YR3/2 粘質土 23 褐色 7.5YR4/4 粘土
- 24 にぶい黄褐色 10YR5/4 砂質土 25 明黄褐色 10YR7/6 粘質土 26 明黄褐色 2.5Y7/6 砂質土

図7 調査区Y=-32760セクション 断面図

1区第1遺構面と2区第1遺構面は整地土上面、1区第2遺構面はにぶい黄褐色（10YR4/3）砂質土層上面と地山上面、1区第3遺構面と2区第2遺構面は地山上面である。

なお、本来ならば現地調査において1区第2遺構面のにぶい黄褐色（10YR4/3）砂質土層が調査区中央の部分の比較的狭い範囲に存在していたが、掘削時に認識できておらずそのまま地山面まで掘り進めてしまった。掘り進めた後、現地での断面観察によりにぶい黄褐色（10YR4/3）砂質土層が存在することがわかったため、この層の上面を切り込んでいる古墳時代以降の遺構を報告書では第2遺構面の遺構として報告する。

第1遺構面（図8・9 写真図版6）

1区第1遺構面では土手状遺構・溝1条・土坑4基を検出した。いずれも近世以前の遺構である。第1遺構面では耕作地を整地する際に地山である明黄褐色粘土を採取し、採取した粘土を貼り谷の肩を平坦にし、その後耕作地から谷の肩へと耕土が流れ込まないために土手状遺構を盛ったと考えられる。また、土手状遺構は整地が施される本来の谷の肩と並行して盛られているため、整地が本来の谷の肩を意識し施されたと考えられる。土坑は耕作に伴い水溜等に使用されていた可能性は高い。

検出した遺構は次のとおりである。

土手状遺構（図9 写真図版6）

調査区北端で検出した。断面が台形状で、幅は0.7m～1.2m程度・上端幅0.3m～0.7m・高さ0.3mを測る。耕作の際に地山に類似した明褐色粘土が盛られた土手であると考えられる。北東から南西方向に走り、北東・南西側ともに調査区外へのびる。

I. P. +48.00m

5溝（図8・9）

調査区中央を東西に走る溝である。土手状遺構にほぼ並行し幅0.2m～0.5m、深さ0.2m～0.6mを測る。整地土の明褐色粘土層を切り込む。調査区北東側断面を観察すると地山ブロックが埋土中に確認できることから短期間に掘られ、埋められたと考えられる。

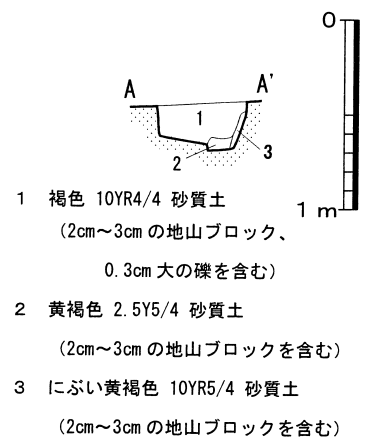


図8 1区 5溝 断面図

1土坑（図9）

調査区南端で検出した。長辺4.9m・短辺2.9m程度・深さ0.9mを測る平面が隅丸方形の大型土坑である。地山である明褐色粘土層の下層である明黄褐色砂礫土層まで削られており、粘土採取坑であった可能性が高い。

2土坑（図9）

1土坑の西側で検出した。大半が調査区外となる。検出した部分で長さ幅ともに2.1m・深さ1.1mを測る。短期間に掘られ埋められたような堆積状況が確認できる。

3土坑（図9）

調査区の中央で検出した。長辺2.5m・短辺1.0m・深さ0.5mを測る平面が隅丸方形の土坑である。短期間に掘られ埋められたような堆積状況が確認できる。

4土坑（図9）

3土坑の西側で検出した。長辺2.5m・短辺1.7m・深さ0.4mを測る平面が隅丸方形の土坑である。短期間に掘られ埋められたような堆積状況が確認できる。

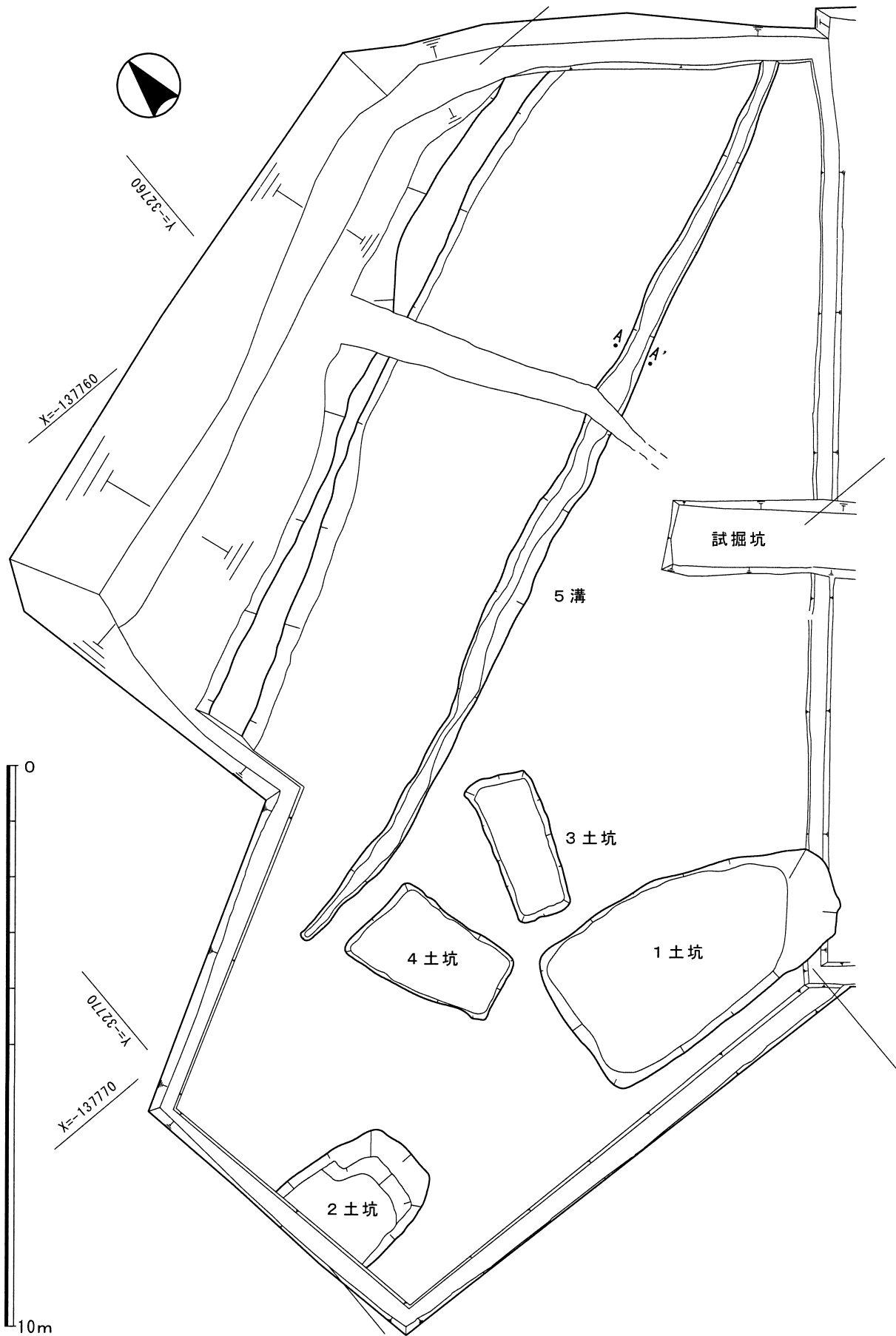


图9 1区 第1遺構面

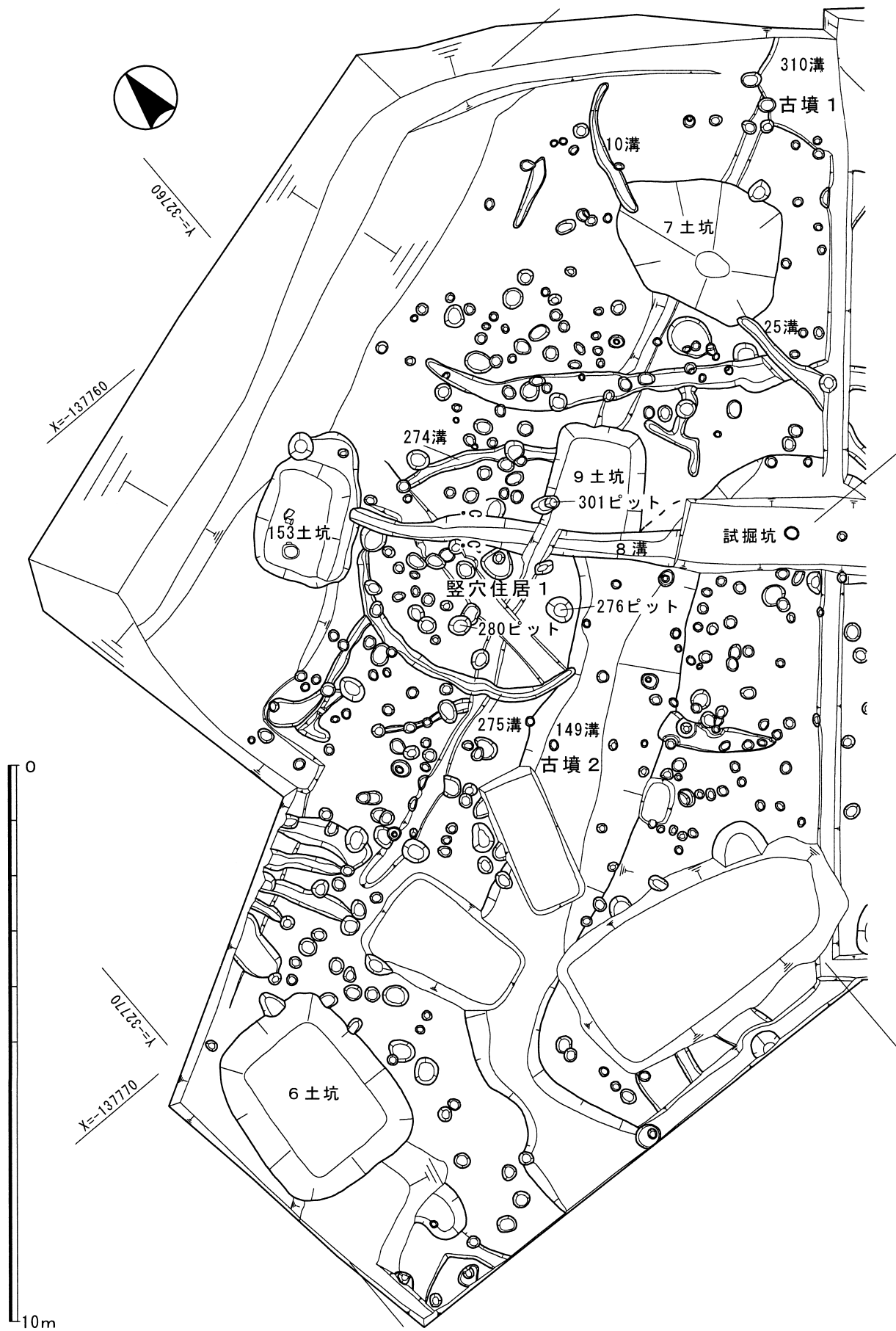


図10 1区 第2・第3遺構面

第2遺構面（図10～14 写真図版2～4）

調査区南半では平成16年度に検出された方墳（古墳2）の周溝の西半部分や溝・土坑等を検出した。
 主な遺構は次のとおりである。

6土坑（図11 写真図版2・3）

調査区の南西で検出した。長辺 3.4m・短辺 2.7m程度・深さ 1.2mを測る平面が隅丸方形の大型土坑である。埋土は周辺の地山層に類似し、短期間に埋められたような堆積状況である。土坑の下層では比較的均質な粘土層が見られるため、整地を施すため掘られた粘土採取坑であった可能性が高い。



図11 1区 6土坑 平面図・断面図

8溝 (図10・12 写真図版2～4)

調査区の中央で検出した。幅は 0.3m～ 0.6m・深さ 0.4m程度を測る。古墳2 (149溝) を切り南東から北西に走る溝である。土師器・弥生土器が出土する。古墳時代後期～古代にかけての遺構である。平成16年度調査で検出した掘立柱建物等と関連する溝である可能性も考えられる。

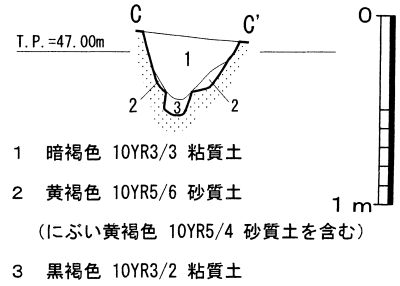


図12 1区 8溝 断面図

古墳1 (310溝) (図10 写真図版2・3)

調査区東側で検出した。平成16年度調査で検出した円墳または方墳の周溝である。周溝から遺物は出土しなかった。平成16年度の調査成果により時期は古墳時代後期の遺構であると考えられる。

古墳2 (149溝) (図10・13・14 写真図版2～4)

平成16年度調査で検出した方墳の周溝である。今回の調査で外周が一辺14m程度に復元できることがわかった。幅 0.9m～ 2.3m・深さ 0.4m程度、調査区南側で幅 2.3m・深さ 0.2mを測る。埋土は上層が暗褐色粘質土・褐色粘質土、中層が黒褐色粘質土、下層ではにぶい黄褐色粘質土が堆積する。また、調査区中央では上層が褐色粘質土、中層が黒褐色粘質土、下層では褐色粘土・黄褐色粘質土が堆積する。

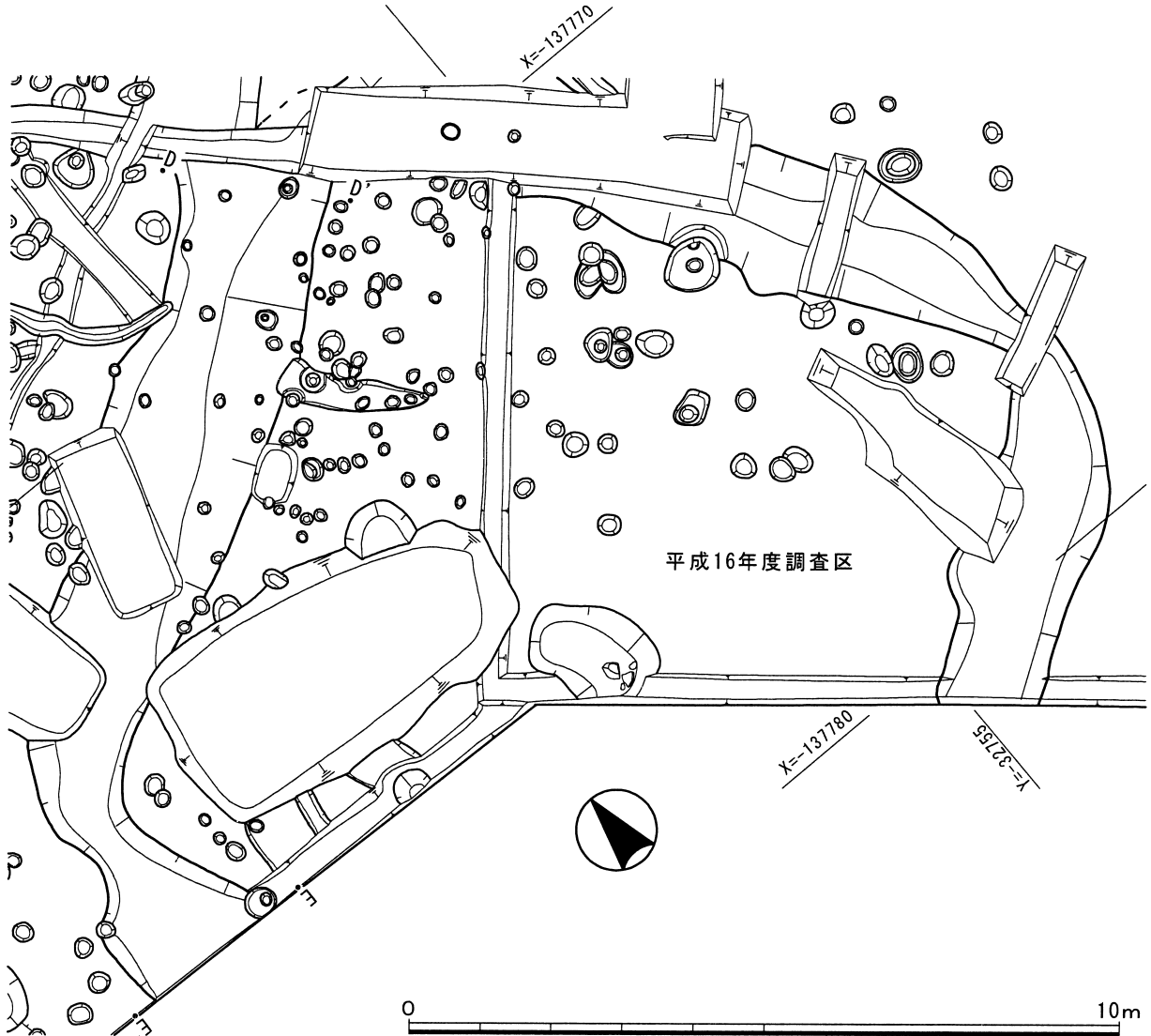


図13 1区 古墳2 (149溝) 平面図

流水・滞水による堆積層は認められなかった。遺物はほとんど検出されておらず、各層より弥生土器の細片、褐色粘質土より石鏃1点が出土している。後世の耕作により削平されており、墳丘の盛土は確認できなかった。

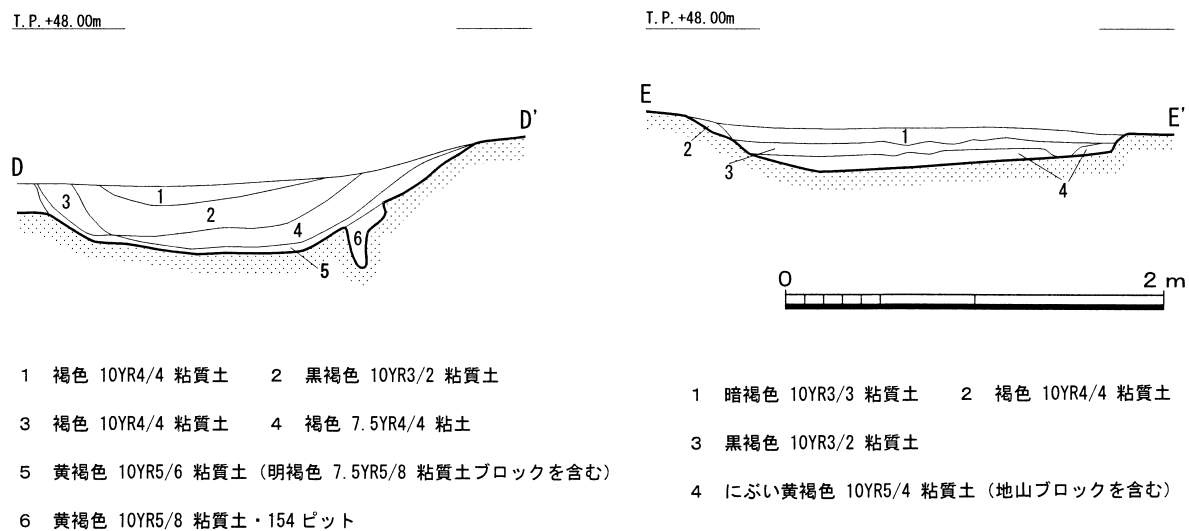


図14 1区 古墳2 (149溝) 断面図

第3遺構面 (図10・15~22 写真図版2~4)

調査区中央では竪穴住居や下層より焼土塊が出土した土坑を検出した。また、北西端では土器が多量に出土した土坑も検出されている。

主な遺構は次のとおりである。

7土坑 (図10・15・16 写真図版2~4)

調査区の東で検出した。長径 3.2m・短径 2.5m・深さ 0.9mを測る平面が不整楕円形、断面がすり鉢状の土坑である。埋土は上層が黒褐色砂質土層、中層は灰黄褐色粘質土層・にぶい黄褐色砂質土・明黄

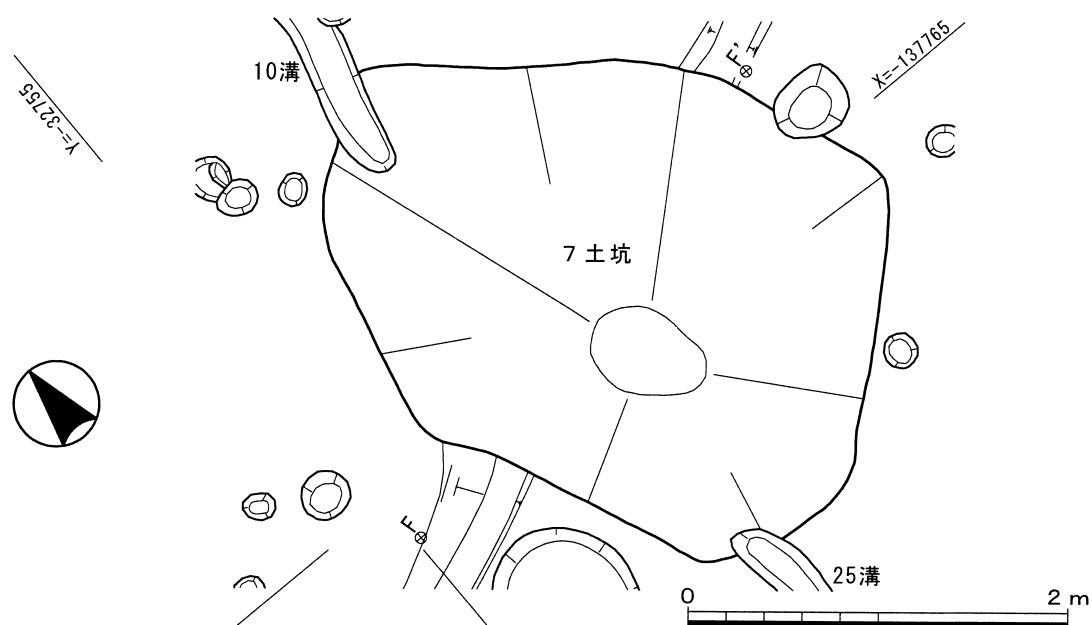


図15 1区 7土坑 平面図

褐色粘質土、灰黄褐色粘質土、下層は褐灰色粘土が堆積する。下層の褐灰色粘土では滞水による堆積が認められる。また、7土坑付近にある25溝は7土坑に水を注ぎ込むように流れ、10溝があふれた水を谷の肩へと流すため掘られたと考えることもでき水溜めに使用されていた可能性も考えられるが、検出時に判断できなかったため定かではない。各層より弥生土器の壺や甕・石器が出土した。出土遺物より弥生時代中期後半の遺構であると考えられる。

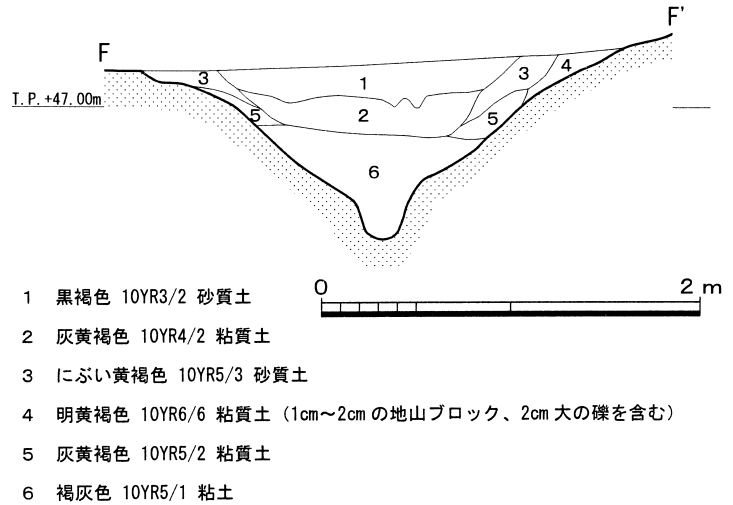


図16 1区 7土坑 断面図

9土坑 (図17・18 写真図版2～4)

長辺 2.0m以上・短辺 1.7m・深さ 0.5mを測る平面が隅丸長方形の土坑である。竪穴住居1を切っている。埋土は上層が褐色砂質土・にぶい黄褐色 (10YR5/4) 粘質土、中層はにぶい黄褐色 (10YR4/3)

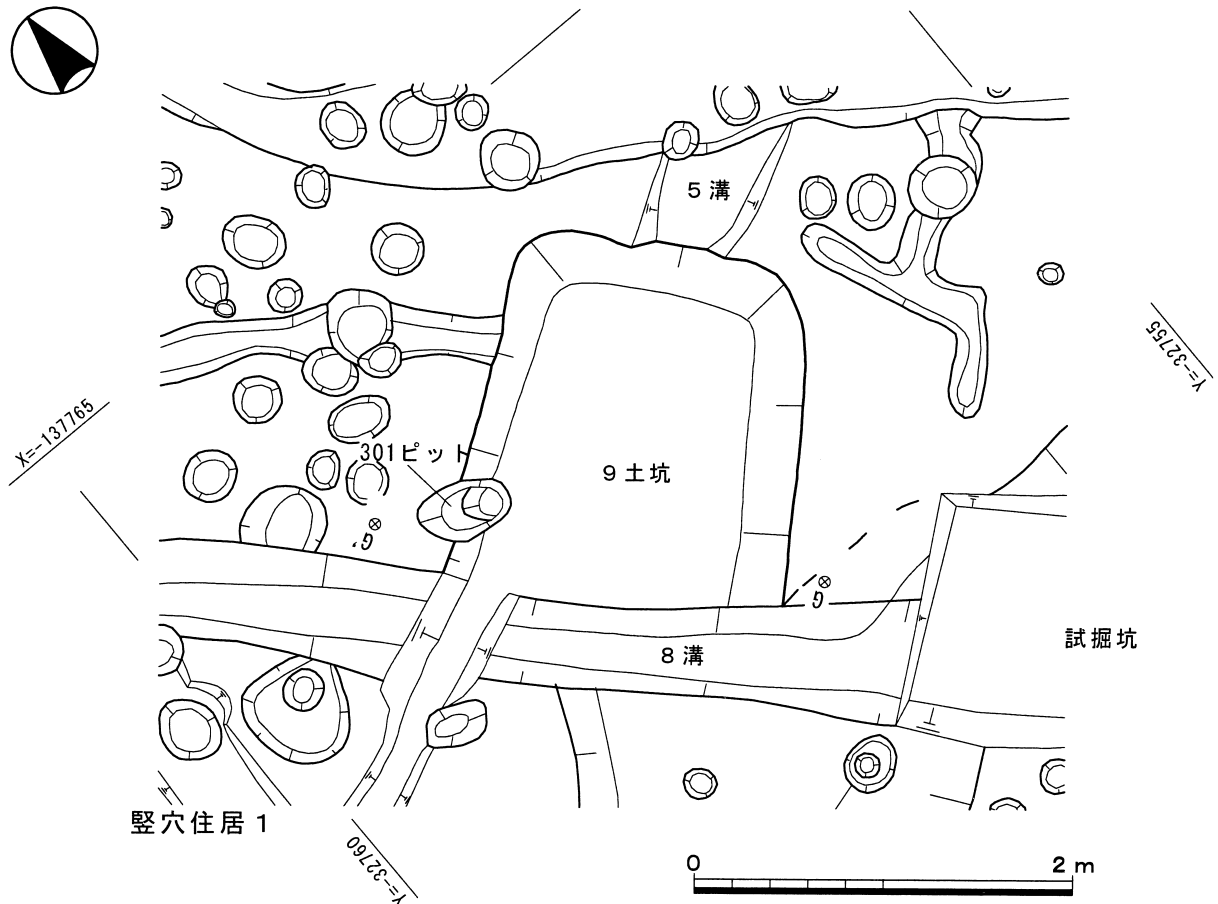
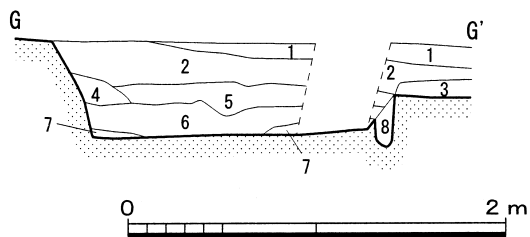


図17 1区 9土坑 平面図

粘質土・黄褐色粘質土、下層は灰黄褐色粘質土・灰黄褐色粘土が堆積する。上層は竪穴住居1の埋土にも見られ、この土坑は竪穴住居1が廃棄され埋まるまでの短期間に掘られ埋められたと考えられる。弥生時代中期後半の壺・甕などが出土した。また、下層では少量の焼土塊が出土した。弥生時代中期後半の遺構であると考えられる。

T. P. +48.00m



- 1 褐色 10YR4/4 砂質土
- 2 にぶい黄褐色 10YR5/4 粘質土
- 3 黄褐色 10YR5/6 粘質土 (にぶい黄褐色 10YR4/3 砂質土を含む)
- 4 にぶい黄褐色 10YR4/3 粘質土
- 5 黄褐色 10YR5/8 粘質土
- 6 灰黄褐色 10YR4/2 粘質土 (上層のブロック含む、炭化物含む)
- 7 灰黄褐色 10YR4/2 粘土
- 8 にぶい黄褐色 10YR5/4 粘質土・301 ピット

図18 1区 9土坑 断面図

153土坑 (図10・19・20 写真図版2～4)

調査区北端で検出した。長径 2.8m・短径 1.8m以上・深さ 0.6mを測る平面が楕円形の土坑である。埋土は上層で褐色粘質土層、中層で炭化物・焼土ブロックを含む褐色粘質土層、下層で黄褐色粘質土

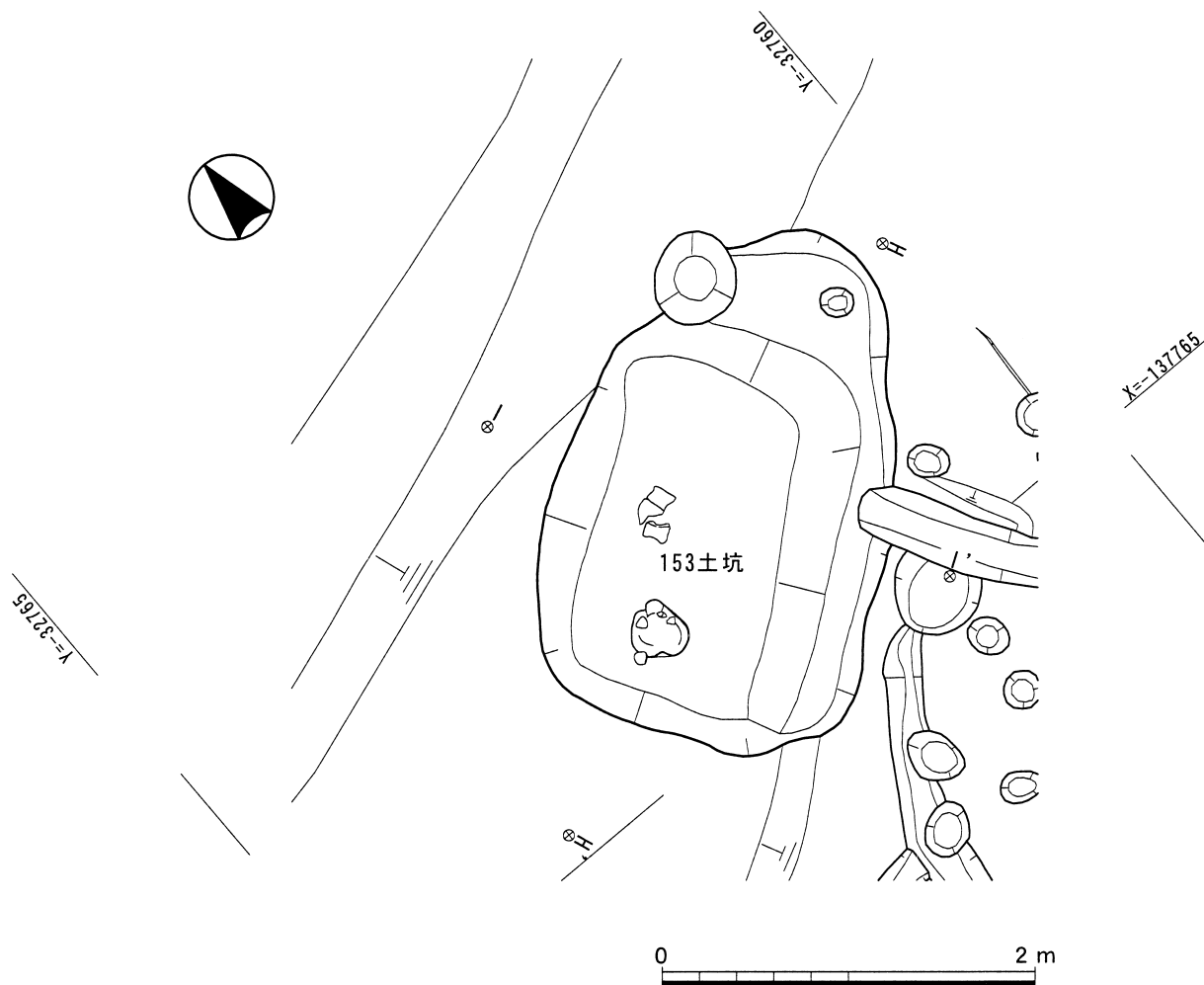


図19 1区 153土坑 平面図

層・褐色粘質土層が堆積する。また、南側から流れ込み埋まったもしくは埋められたような堆積状況が確認できる。ゴミ溜め等に使用されていた可能性も考えられる。各層から弥生土器壺・甕・鉢又は台付鉢・蓋等が出土した。出土遺物より弥生時代中期後半の遺構であると思われる。

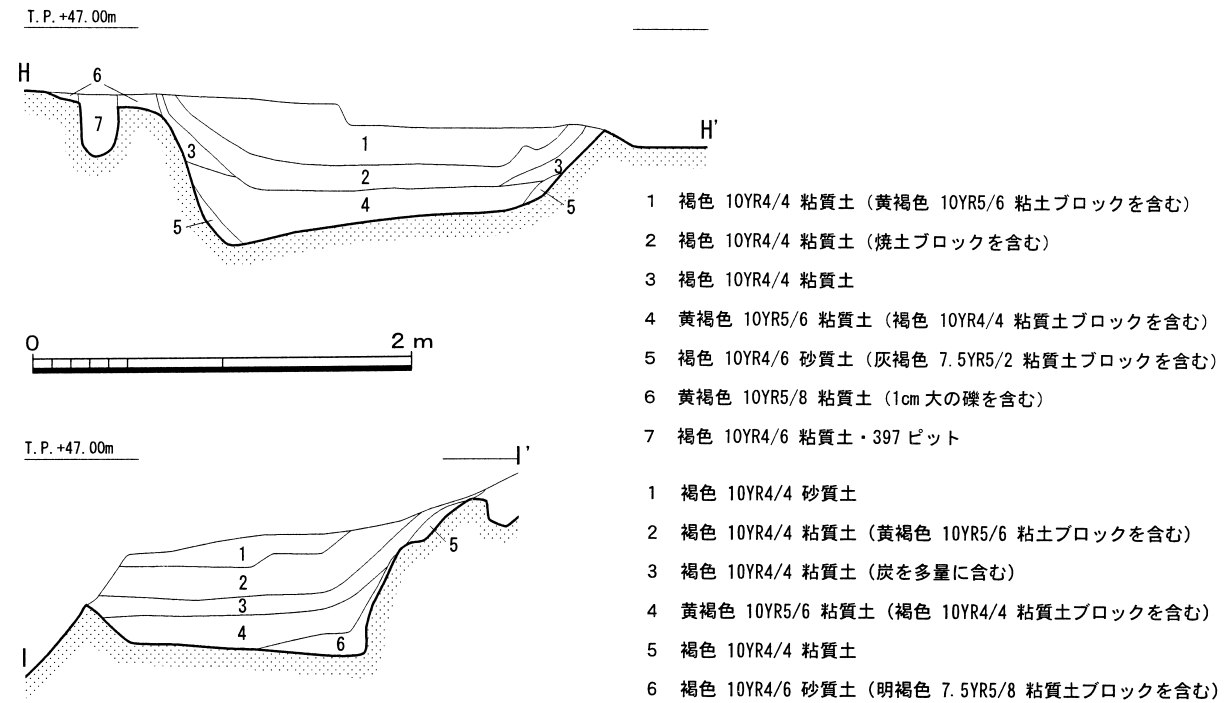


図20 1区 153土坑 断面図

竪穴住居1 (274溝・275溝・276ピット・280ピット・301ピット) (図10・21・22 写真図版2～4)

調査区中央で検出した。壁溝の約4分の3が残存しており、壁溝の弧から復元すると直径4.5m程度のやや不整形な円形竪穴住居であると考えられる。壁溝(274溝・275溝)は幅0.2m～0.3m・深さ0.1

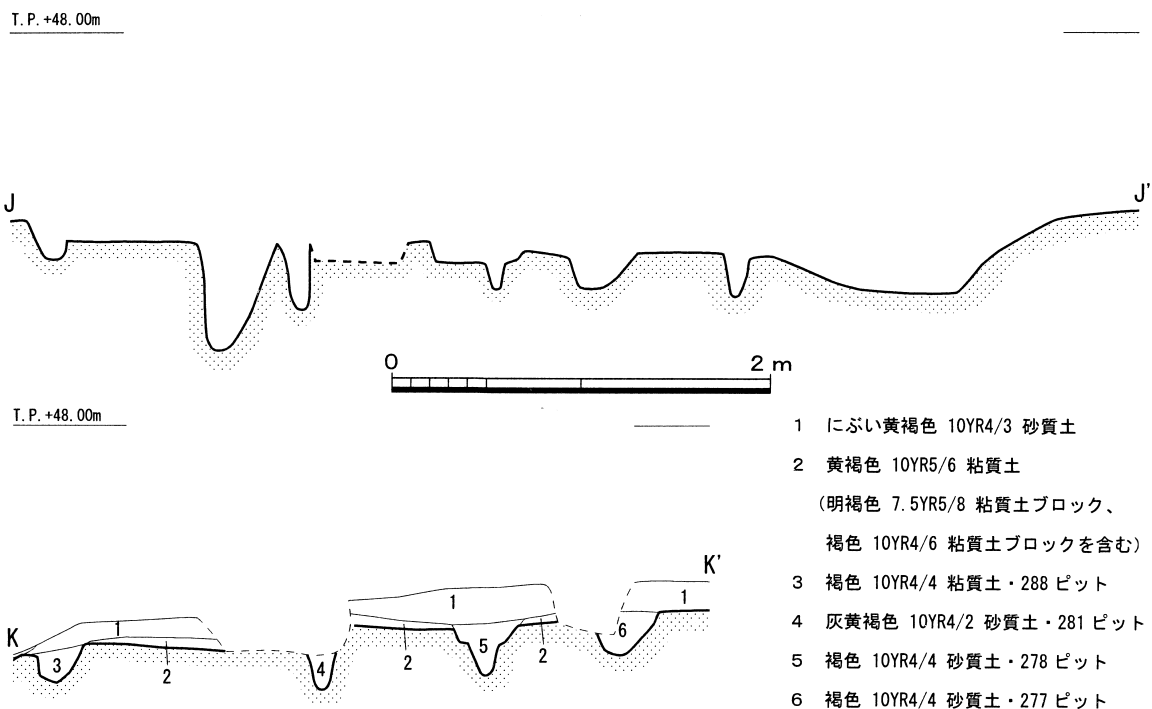


図21 1区 竪穴住居1 断面図

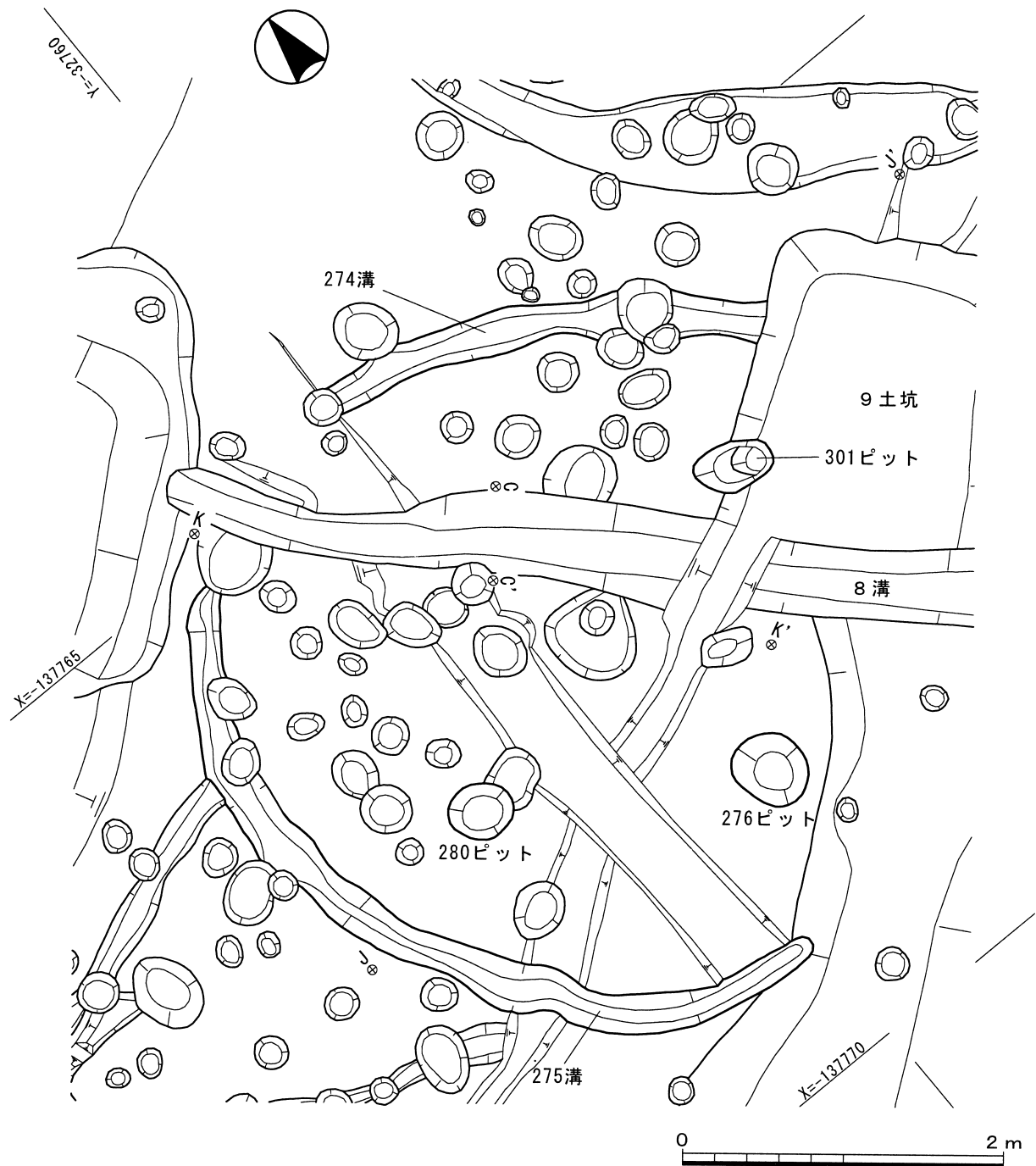


図22 1区 竪穴住居1 平面図

mを測る。住居の柱穴と考えられるピット（276ピット・280ピット・301ピット）はいずれも直径0.4m前後、深さ0.4m～0.6mを測る。排水溝・炉等の付属施設は確認できなかった。壁溝・柱穴から弥生土器の細片が出土している。弥生時代中期後半の遺構であると考えられる。

ピット群（図10 写真図版2・3）

336基のピットを検出した。直径0.2m～0.4m・深さが0.4m～0.6m程を測る。建物等に復元できるものは確認できなかったが、調査区南側の1土坑付近や3土坑付近ではピットが集中して掘られており、削平された竪穴住居の残欠である可能性は高い。

2区

層序 (図23)

2区も1区と同様に耕作等の削平による地形の改変がかなり行われている。このため、遺跡の本来の層序はほとんど遺されていない。全面に盛土が施される。南側では谷が埋め立てられ調査区と同一面となっている。

基本層序は盛土、耕土、灰オリーブ色砂質土層、整地土、耕土、橙色砂質土層（地山）の順である。整地土まではほぼ1区と同じ様相を呈するが、整地土と地山の間には包含層ではなく耕土が確認できる。

盛土は調査区全面に施され0.6mを測る。近年の施工であると考えられる。

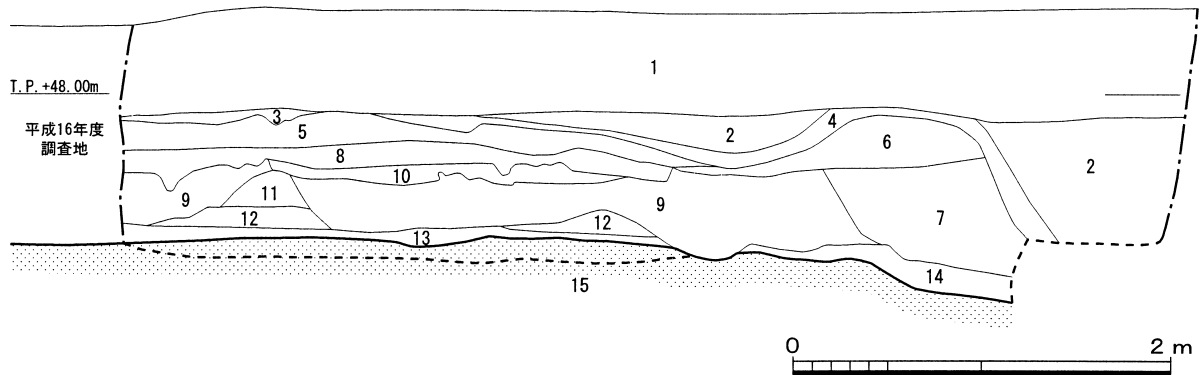
盛土直下の耕土は灰色砂質土層・黄褐色砂質土層である。宅地化以前に耕作地であったことを示し、おそらく畑作が行われていたと考えられる。各層厚さ0.2m程度部分的に残存する。

灰オリーブ色砂質土は旧耕土の直下層で、近世以前の耕作土であると思われる。0.2m程度確認でき、締まりはあまり良くない。

整地土は厚さ0.3m～0.7mを測る。1区と同様に土色・土質ともに地山と類似し、全域で見られる。この層より縄文土器・円筒・形象埴輪・陶器等が出土した。

整地土直下では黄灰色砂質土・灰白色砂質土の2層の耕土が確認できる。各層ともに整地土を施す際に削平されてわずかに残存するのみである。

地山は全域で礫を含む橙色砂質土層である。



- 1 盛土 2 攪乱 3 オリーブ黒色 7.5Y3/1 砂質土 4 黒色 2.5Y2/1 砂質土 5 灰色 7.5Y4/1 砂質土
- 6 明黄褐色 10YR6/8 粘質土・整地土 7 明黄褐色 10YR6/6 砂質土 (1cm～4cm 大の礫を含む)・整地土
- 8 黄褐色 2.5Y5/3 砂質土 9 明褐色 7.5YR5/6 粘質土・整地土 10 灰オリーブ色 5Y4/2 砂質土
- 11 灰白色 2.5Y7/1 砂質土 12 黄灰色 2.5Y6/1 砂質土 13 黒褐色 10YR3/2 粘質土
- 14 オリーブ褐色 2.5Y4/3 粘質土 (明褐色 7.5YR5/6 粘質土ブロックを含む)
- 15 橙色 7.5YR6/6 砂質土 (0.1cm～2cm 大の礫を含む)・地山

図23 2区 調査区北東壁 断面図

第1遺構面 (図24 写真図版6)

2区第1遺構面では土手状遺構を検出した。断面は台形状で、幅1.5m程度・上端幅0.6m～0.8m・高さ0.6mを測る。1区で検出された土手状遺構と機能や用途は同じであると考えられる。東西に走り調査区外へと伸びる。また、整地土側に溝が伴う。この溝は幅0.8mを測るが検出の際に本来の肩を削平してしまったため、断面観察からそれ以上の規模であったと推測される。1区の土手状遺構等と同時期に作られたと考えられる。

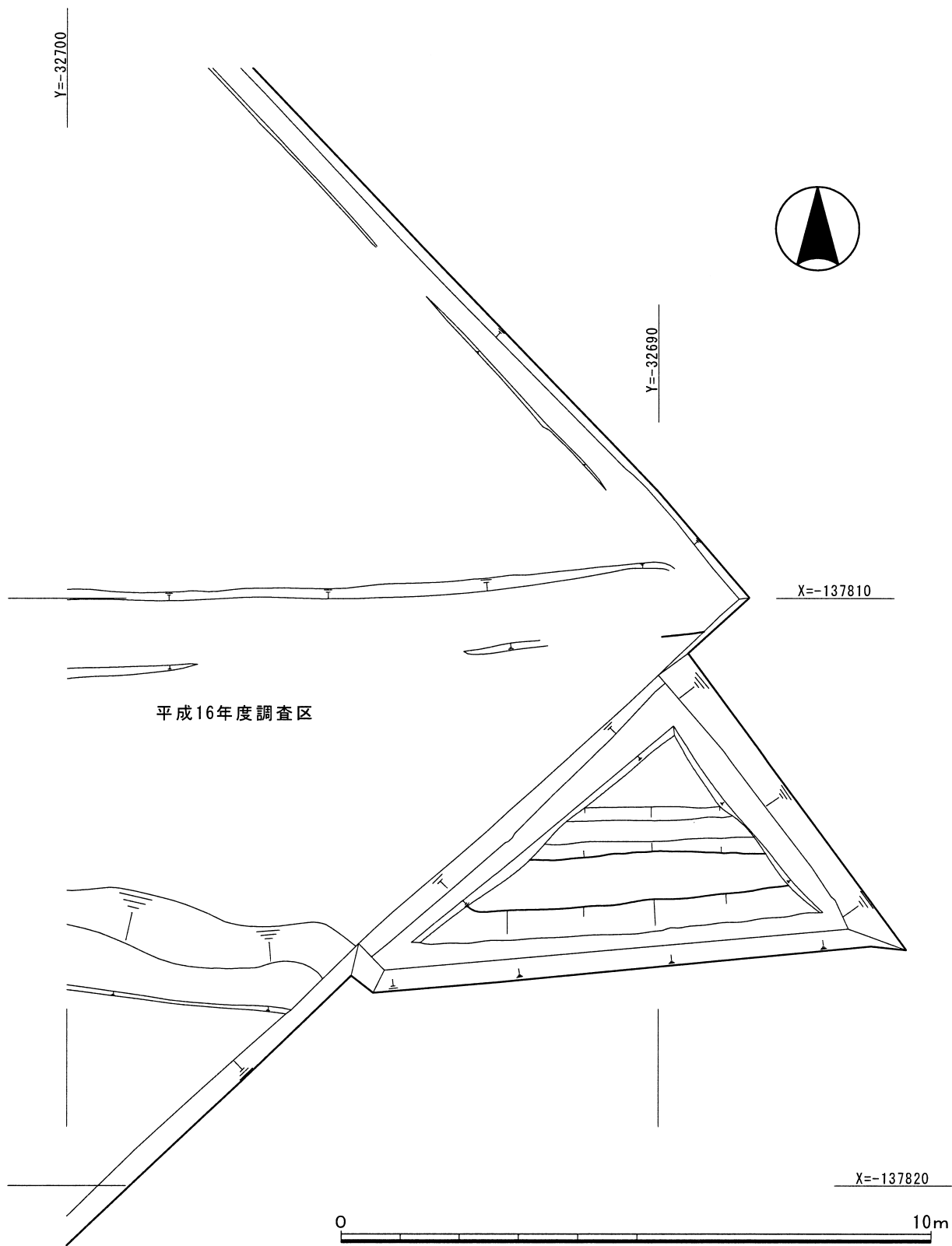


図24 2区 第1遺構面

第2遺構面（図25 写真図版2・5）

ピット17基・土坑2基を検出した。ピットは直径0.2m～0.4m、深さは検出長で0.5m～0.7mを測る。出土遺物により弥生時代のピットであると考えられる。建物等に復元できるものは確認できなかったが、平成16年度の調査で検出した竪穴住居1に伴う柱穴である可能性が高い。

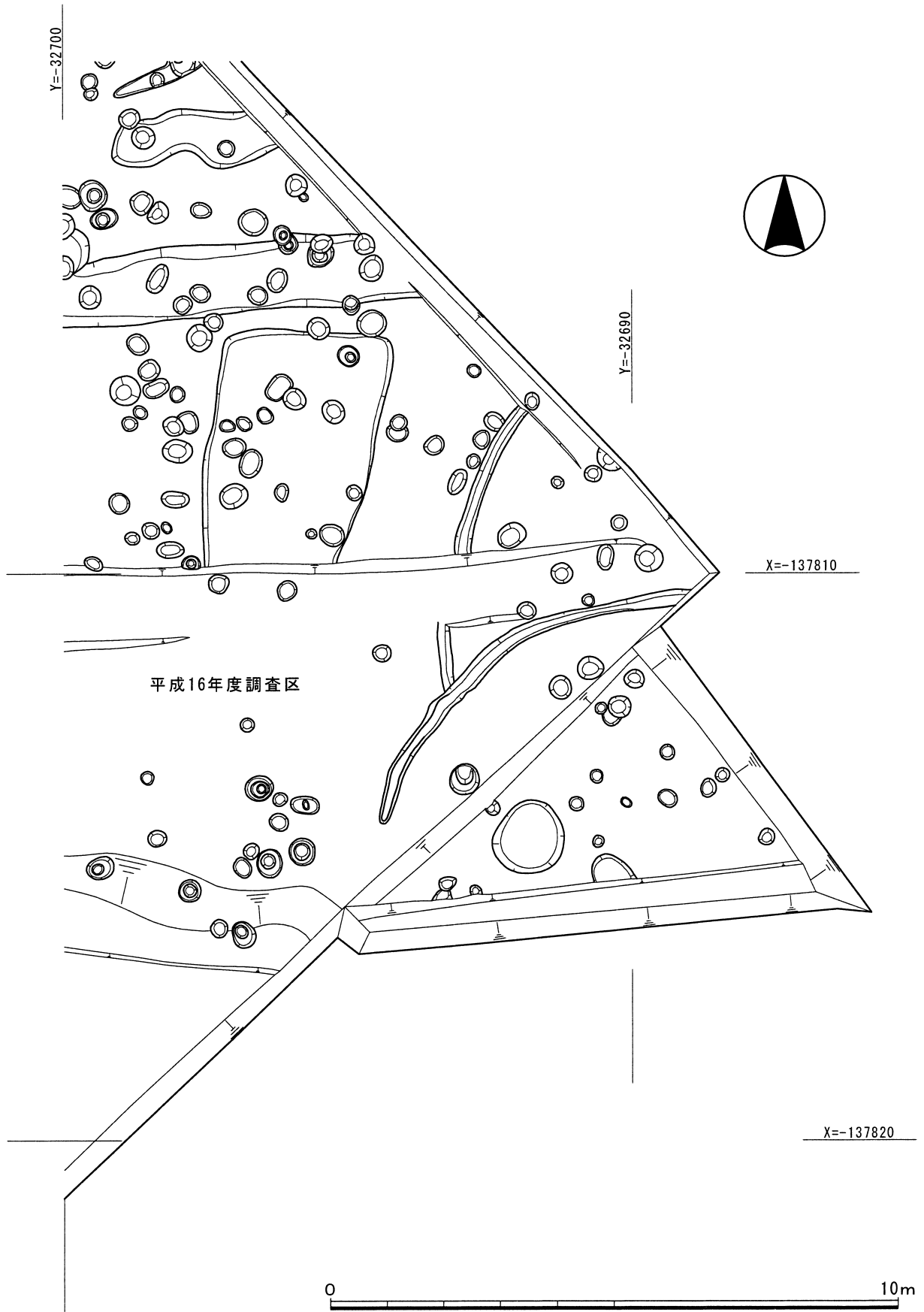


図25 2区 第2遺構面

第3節 遺物

今回出土した遺物は弥生土器・須恵器・瓦器・磁器・瓦・石器等で、コンテナで10箱程度であった。

土器・土製品

1区

包含層（図26・27 写真図版7）

1は瓦器碗である。口縁端部内端に1条の沈線が施される。楠葉型であると思われる。復元口径は13.6cmを測る。2は須恵器坏身である。口縁端部を欠損する。3は弥生土器台付鉢の脚台部である。脚台部に径0.5cm強の竹管文を0.3cm間隔で多数施す。復元底径は18.2cmを測る。4は弥生土器大型鉢の口縁部である。口縁端部を水平に拡張させ上面に4条の凹線を施す。体部には上から順に8条の波状文、単位不明の直線文が施される。1はオリブ褐色（2.5Y4/4）粘質土層、2・3は褐色（10YR4/4）粘質土層、4はにぶい黄褐色（10YR4/3）砂質土層から出土した。

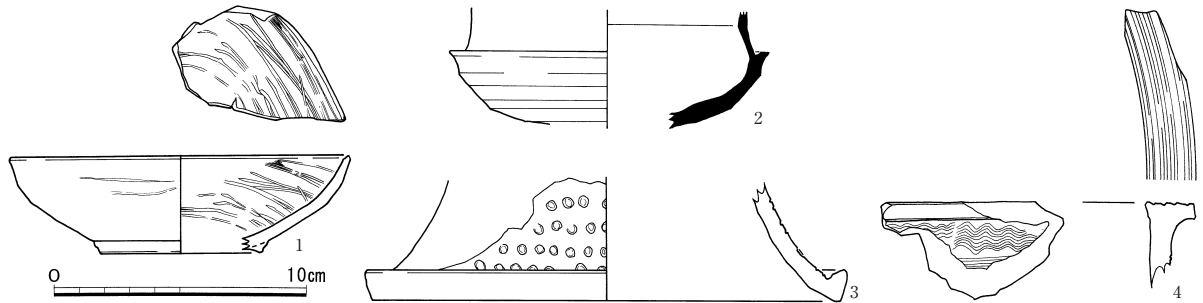


図26 1区 包含層 出土遺物（1）

5～9はY=-32760セクション内より出土した。5は須恵器把手付無蓋高坏である。体部上方より突帯が2条、9条単位の波状文を1帯施す。脚台部には4方向に透孔が施される。口径は16.9cm、底径は10.7cmを測る。6は須恵器坏身である。復元口径は10.6cmを測る。7は須恵器の坏蓋である。復元口径は12.2cmを測る。8・9は土馬で、8は前脚、9は後脚であると考えられる。8の脚の付け根では縦線2条、横線1条の順に馬具の表現と思われる沈線が施す。8と9は同一個体である。

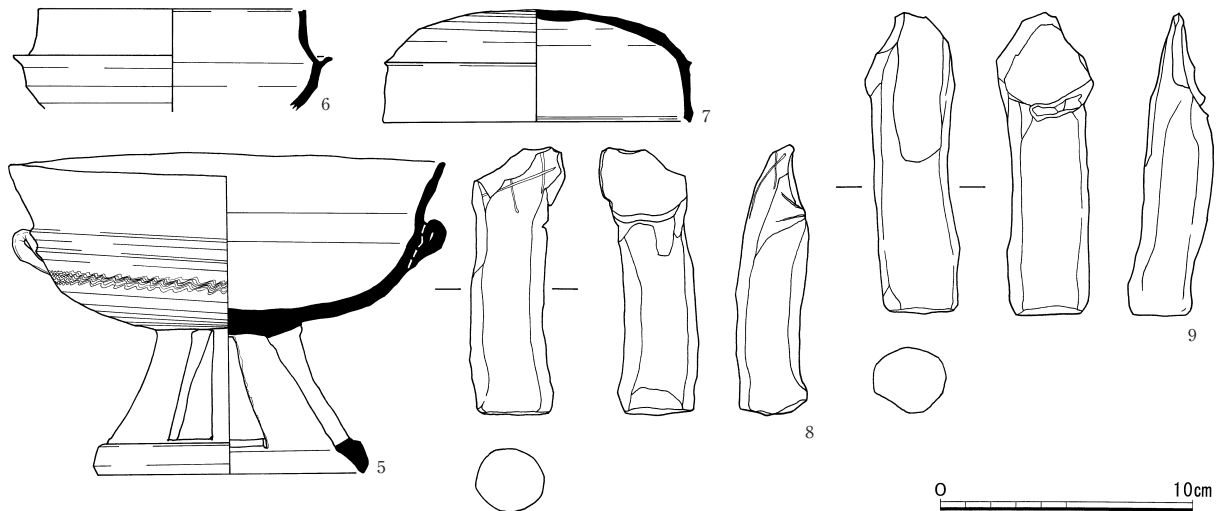


図27 1区 包含層 出土遺物（2）

古墳 2 (149溝) (図28 写真図版7)

10は弥生土器甕底部である。外面は縦方向のヘラミガキ調整、内面は横方向のナデ調整を施す。底部径は4.9cmを測る。

9土坑 (図29 写真図版8・9)

11は弥生土器甕である。口縁端部に一定間隔で刻目文を施す。復元口径は21.8cmを測る。また、図示しなかったが底面は一定方向のヘラミガキ調整、内面は一定方向のナデ調整を施す器種不明な弥生土器片・粉痕が残る土器片も出土する。

153土坑 (図30・31 写真図版9・10)

12~20はすべて弥生土器である。12は甕である。口縁部は「く」の字に折れる。外面は不定方向のハケ調整を施す。ユビオサエの痕跡が確認できる。復元口径は17.6cmを測る。13は壺である。底部のみ残存する。底部径6.0cmを測る。14は甕である。復元口径10.2cmを測る。15は鉢または台付鉢の口縁部である。口縁部外面、体部外面に11条を単位とする簾状文を3帯、すべて同一原体で施している。

16~18は壺である。16は口縁部外面に1条の簾状文、その上より一定間隔に刺突文を施している。頸部には3帯の簾状文が施されている。口径は22.9cmを測る。17は摩滅しているため調整等は不明瞭であるが、口縁端部に1条の凹線、頸部外面では単位不明の1帯の簾状文を施している。口径は20.2cmを測る。18は体部下方・底部を欠損する。本来の姿は体部が洋梨状に膨らみ底部に向かい急激にしぼむ形態であったと思われる。口縁部外面では3条の凹線を施した上に均等な間隔で6個以上の円形浮文を配す。口縁部内面では櫛描列点文が一定間隔に施され、口縁部内面を全周する。頸部には4条の凹線を施す。体部では上方より波状文、直線文を交互に3回繰り返し、その下方に2帯の波状文を施す。すべて10条単位の同一原体で施す。体部下方は横方向によるヘラミガキ調整を施す。口径は17.3cmを測る。

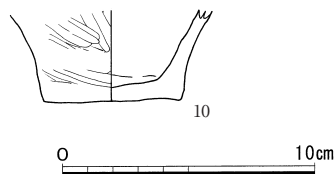


図28 1区 古墳2 (149溝) 出土遺物

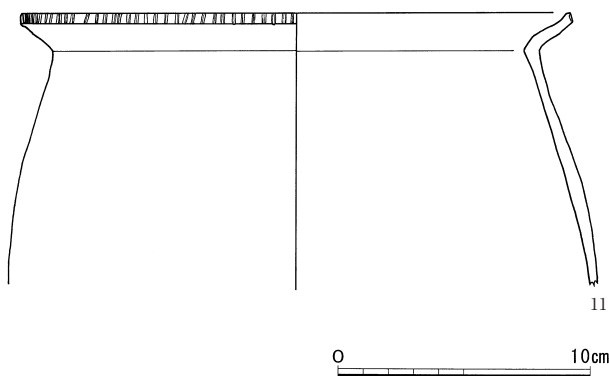


図29 1区 9土坑 出土遺物

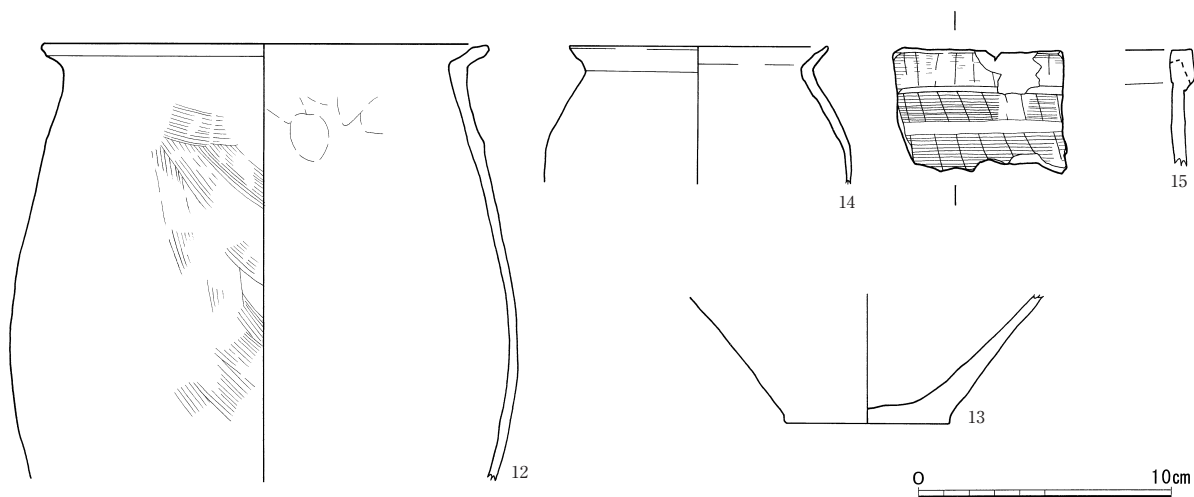


図30 1区 153土坑 出土遺物 (1)

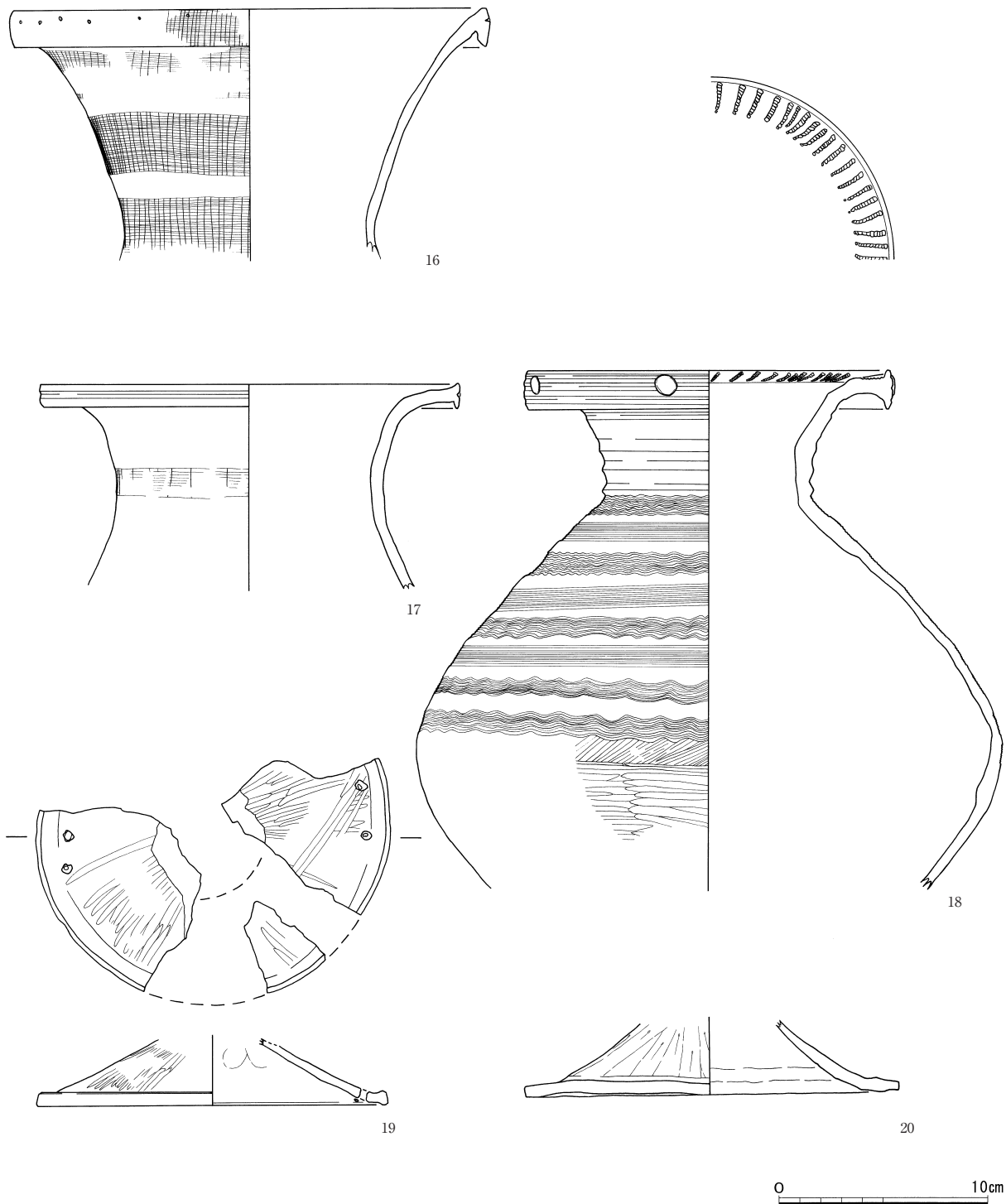


図31 1区 153土坑 出土遺物(2)

19・20は蓋である。19は外面にヘラミガキ調整を施す。内面は摩滅しているため調整は不明瞭であるが、口縁部は横方向のナデ調整を施す。径 0.3cm程度の2孔1単位とし計4孔を対象になるよう外面から内面に穿つ。復元口径は17.0cmを測る。20は甕の蓋である。外面は縦方向のヘラケズリのみで仕上げている。内面は横方向のナデ調整を施す。内面には炭化物がドーナツ状に付着する。また炭化物が付着している部分にかすかな凹線が1条回っている。これは甕に蓋を被せた時についた使用痕であると思われる。この蓋では口径11cm前後の甕を使用し煮炊きを行っていたと推測される。口径18.0cmを測る。

2区 (図32 写真図版11)

いずれも整地土中より出土した。21は須恵器高坏で、長脚二段透かしの脚部である。22は盾または家と考えられる形象埴輪の破片である。外面には横方向の沈線が4条、縦方向の沈線が3条施した後、突帯を貼り付ける。図示していないが円筒埴輪底部・縄文土器 (図版11左上) も出土した。円筒埴輪底部は内外面とも摩滅しているため調整は不明である。内面は二次焼成を受け煤が付着する。縄文土器は押型文土器と思われる口縁部片である。

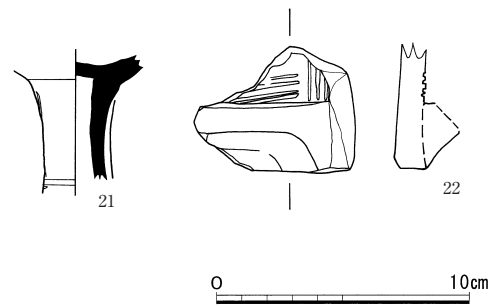


図32 2区 包含層 出土遺物

その他

焼土塊 (写真図版13)

9土坑から焼土塊 (焼成粘土塊) が出土している。遺構記述にあるように、9土坑は平面が長方形に近く、壁面がほぼ垂直に立ち上がって底面が平坦という、他の土坑とは異なる形態を示している。そして、下層に多くの土器片とともに焼土塊が包含されていたわけである。図版13に掲載したものが焼土塊である。出土量は多く、写真よりも大型の塊もあったが、極めて脆いため取り上げ及び洗浄中に大部分が碎けている。写真右上のもので天地7cm、左右6cmほどである。9土坑のような形態で焼土が含まれる遺構については、土器焼成に関わるものなどの推定がなされることが多い。しかし、9土坑については壁面に被熱の痕跡は残っておらず、包含されていた土器片もまた同様である。そこで、焼土塊の状態について観察の記録を記し、今後の検討での素材としておきたい。

焼土塊は淡い橙色を呈するものが多いが、これは内面であり、表面被熱部分は灰色～にぶい黄橙色である。上述の、大きさを記したものが表面の4分の1ほど被熱面が残っており、径7cmほどの不整形な球塊が一つの大きさを示すものと考えてよいだろう。より大きな塊があったことは、前記のとおりである。質は脆弱で、触れると粉状に崩壊する。また、残存する被熱部分の厚さは3mmほどで、長時間にわたって火中にあったものとは考えがたい。ただ、内部まで赤変していることから熱量は高いものと思われる。次に表面の状況を見ると、径0.5mm～1mm下の小さな穴が多数見られる。これは植物の根と見做してよい。9土坑の壁面は高位段丘層であり、試みに同層の土を塊状にして焼成したところ、細い根が燃えた部分は表面に同様の痕跡が多数認められた。そのさい、採取したままの土塊と練った土塊の両方を焼成したが、後者の方は径2mm～3mmのやや太い根の跡以外はほとんど確認できない状況であった。また、内部の緻密さにも明らかな違いが認められた。そのため、出土した焼土塊は土層中から掘り出された土の塊がそのまま熱を受けたものと見做してよいだろう。もちろん、元の粘土塊が土器素材であったかも知れない。また異地性粘土の可能性もある。焼土塊に含まれる鉱物は、肉眼観察では周辺地層に含まれるものと大差なく、際立った特徴を持つものではない。専門的見地から見れば産地推定は可能だろうが、出土物の状況からすると、近隣で掘削され火熱を受けて焼土塊となったものが、多量の土器片とともに土坑中に投棄されたと記述するのが妥当かと思われる。

集落内で焼土塊が生成されるほど火熱を受ける要因の一つに、当然土器焼成行為が挙げられる。9土坑に焼成の痕跡は残っていなかったが、9土坑も候補に加え、近くで土器焼成が行われていたと推定することはできるだろう。

石器 (図33・34 写真図版12・13)

1区で69点、2区で2点の石器を検出した。1区出土の石庖丁2点を除けば、他はすべてサヌカイトである。2区は剥片のみであり、したがって図示したものはいずれも1区の石器である。

全体的に見ると、石器はいずれも弥生時代のものであり、製品は少なく剥片が多い。しかし、現地調査ではとくに石器検出を目的とした選別作業は行っておらず、細片の見落としが少なからずあったことは否めない。

出土位置は各層各遺構に及び、自然崩落のほか、整地や耕作など人為的な地業によって水平方向と垂直方向の移動を繰り返したとみられる。しかし、丘陵頂部に近い場所であり、さほどの距離を移動したものは考えられない。

図33は遺構以外の土層から出土したものである。23は旧耕作土、24・25・27・28・30は第1遺構面から第2遺構面に至る層中、26と29は地山面直上の層中からの出土である。

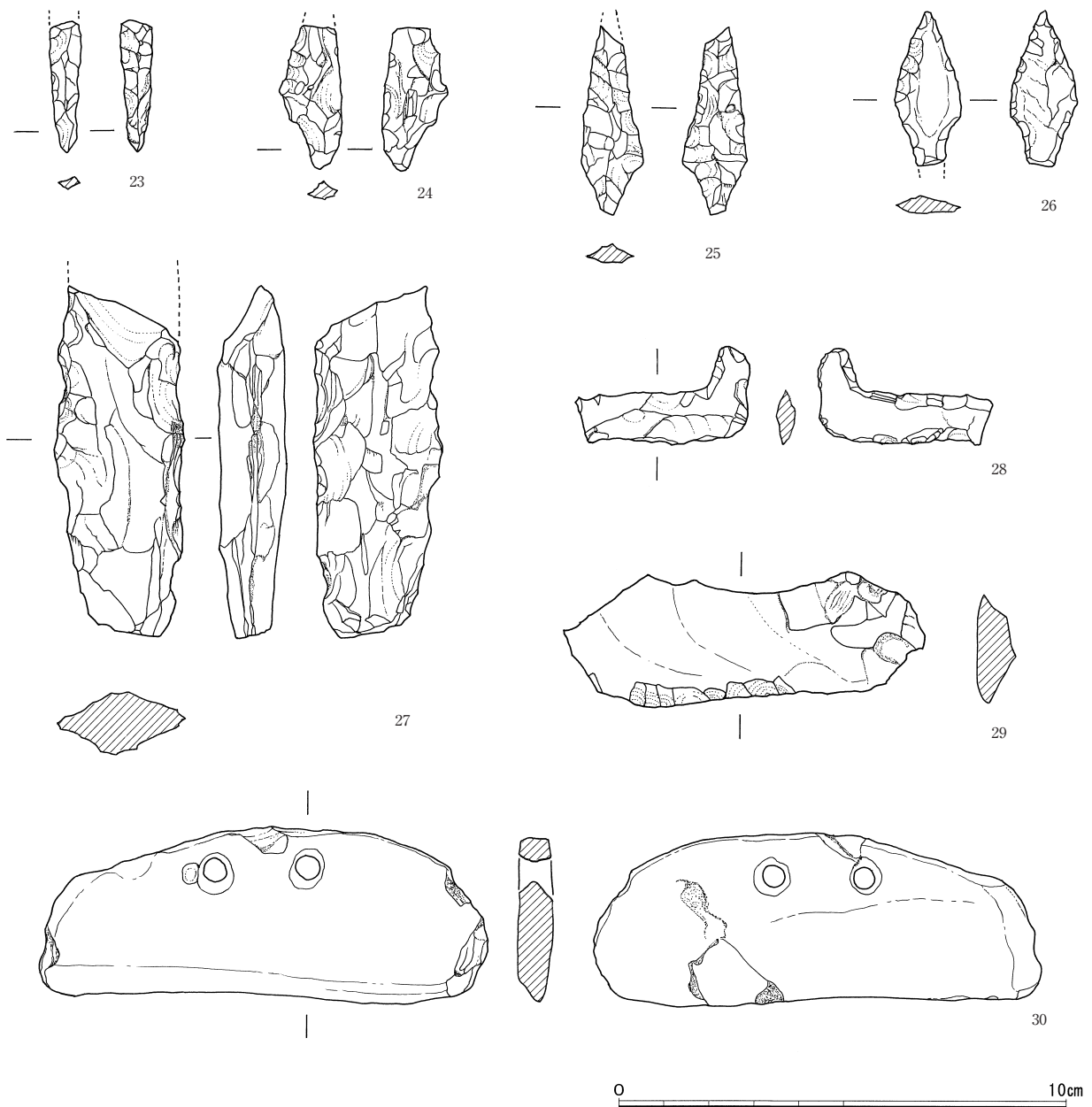


図33 1区 包含層 出土石器

23は石錐の錐部で、撮み部が欠損する。残存長3.01cmで、断面は菱形を呈する。風化が著しく、粗質のサヌカイトである。24も石錐で、細かい階段状剥離により錐部を作出する。残存長3.01cm、錐部断面は扁平な菱形である。25は有茎の石鏃で、先端を欠損する。また、基部もわずかだが欠いている。背面は両側縁から丁寧な剥離を施す。残存長4.39cm、重さ2.59g。26も有茎の石鏃である。基部が欠損し、残存長3.52cm。重さは2.32g。粗質のサヌカイトである。27は石槍で、上半部が欠損する。両側縁から階段状剥離によって成形している。基部端面に原礫面が残る。残存長8.02cm、中央付近での幅2.88cm、最大厚1.46cm、重さは37.63gである。28は一端が直角に近く曲がる形をなし、先端は円く仕上げている。石小刀と考えられる。平行する両側縁の剥離は、整形と見るより刃潰しと考えた方がよいと思われる。曲がる部分の右側縁に使用痕状の潰れがある。全長3.95cm、最大厚0.42cm、重さ2.88gである。29は剥片側縁の一部に使用痕が認められるもので、剥片の腹面側を図示した。幅8.15cm、使用痕の部位は長さ3.68cmほどである。30は石庖丁。片刃直刃で、ほぼ完存している。擦痕は観察できない。孔は全幅のほぼ中央にあり、2孔は1.60cmほど離れる。1孔の際に、孔を穿ちかけた凹みがある。幅10.06cm、中央付近の最大長3.71cm、最大厚0.81cmである。

以上の他、第2遺構面を覆う層中から石庖丁の破片を検出している。細片のため図化していない。

図34は遺構出土の石器である。31は両側縁から階段状剥離により成形しているもので、未成品ではあるが尖頭器としておきたい。全長6.12cm、最大幅2.80cm、最大厚1.18cm、重さ17.99gである。剥離の様子からみて、さらに厚みを減じようとしており、あるいは34のような石鏃を意図しているのかも知れない。第1遺構面の5溝出土。32は石鏃の先端部で、薄手の丁寧な作りである。残存長1.47cm、残存部での最大厚0.32cm。第2遺構面の8溝から出土した。33は撮み部を丁寧に作出した石錐で、完存する。全長4.29cm、錐部長は2.13cm、撮み部最大幅は2.09cmである。錐部断面は菱形を呈する。第3遺構面149溝から出土。34は凸基有茎の石鏃で、茎部下位を欠いている。背腹面とも丁寧な剥離を施している。残存長5.30cm、最大幅1.86cm、最大厚0.49cm、重さ4.14gである。第3遺構面9土坑の下層から出土。

遺構出土の石器のうち、製品は以上のものである。他は剥片で、第1、2、3遺構面の各遺構から出土している。第3遺構面の遺構出土もすべて埋土中であり、剥片や破損品などを意図的に投棄したような状況は認められない。また包含層中出土も含め、検出した剥片は小片が多い。にもかかわらず、原礫面が残っているものが目立つ状況である。推測にすぎないが、小振りの転石が搬入され、石器製作を行った結果ではないだろうか。

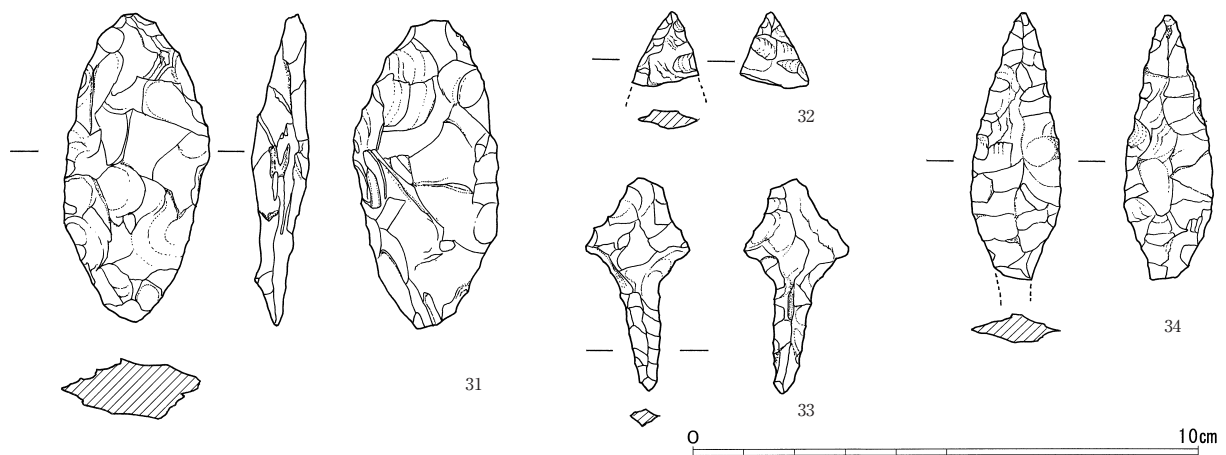


図34 1区 遺構 出土石器

第4章 総括

今回発掘調査を実施した太秦遺跡・太秦古墳群は大阪府北河内地域の代表的な遺跡の一つで早くから周知されていた。「太秦遺跡」は弥生時代中期に現れる高地性集落として、また「太秦古墳群」は、墳形のとどめる古墳は太秦高塚（トノ山古墳）のみであるが、豊富な出土品や採集品などから古墳時代中期～後期の古墳群として斯界では著名な遺跡である。

この太秦遺跡・太秦古墳群の南端をかすめるように第二京阪道路建設及び大阪北道路建設が計画され、財団法人大阪府文化財センターが平成13（2001）年度に実施した太秦古墳群の発掘調査を始めとし、数々の調査を実施した。これらの調査は、周知されながらも開発によって遺跡の内容については不明な点が多い「太秦遺跡・太秦古墳群」に次々と新知見を与えるものであった。

今回の調査においても太秦遺跡・太秦古墳群の様相に新知見を与えることができた。

また、新たに調査区中央の緩斜面に竪穴住居を1棟検出した。この竪穴住居は平成16年度調査に検出された3棟の竪穴住居に比べて規模が小さく炉等の付属施設も確認できていないことや、竪穴住居の周辺にはほぼ同時期に作られたと考えられる焼土塊や炭を多量に含んだ層の確認できる土坑が2基検出されていることから作業等の居住以外のスペースとして使用されていた可能性が考えられるが、今回の調査成果では推測の域をでない。また、竪穴住居が確認できたことにより平成16年度よりもさらに住居群が西に拡がることが判明した。遺構が1区の谷の端でほぼ変わらぬ密度で見ついていることから遺跡範囲が南側に拡大する可能性が高い。「太秦遺跡」でこれまでに確認された弥生時代の遺構の広がる位置を標高で見ると、平成17年度・平成16年度調査区では標高48m弱のほぼ丘陵尾根の頂上である。平成13年度・平成14年度太秦遺跡・太秦古墳群の弥生時代中期の住居址群や7世紀を中心とした竪穴住居が重複する遺構面は標高43.5m～47.8mの南向きの緩斜面テラスに立地する。同じく平成13年度・平成14年度の「大尾遺跡」の調査では、標高43m～45m地点の南向きの緩斜面テラスのほぼ全面的に方形周溝墓を中心とした遺構を検出している。これらの成果から、太秦遺跡が立地する丘陵平坦部から南側に拡がる緩斜面には全面的に弥生時代中期の遺構が分布していると考えられる。谷に併せて埋め立てられた緩斜面の上には多くの遺構が存在するものと考えられる。今回は調査範囲外であった今回の調査地と第二京阪道路および大阪北道路用地の間にはおそらく弥生時代の遺構面が続き「大尾遺跡」と連なるものと考えられる。「大尾遺跡」は「太秦遺跡」の墓域として一体となる可能性が高い。今後の調査成果に期待する。

また、「太秦古墳群」としては古墳1（310溝）の周溝も検出できたが平成16年度の調査と今回の成果を合わせても墳形が方墳と円墳のどちらであるか判断するまでにはいたらなかった。しかし、平成16年度調査区で検出した方墳または円墳の周溝と考えられていた古墳2（149溝）は今回の調査によって周溝端が確認できたため、一辺が14m程度の方墳であることが確認できた。また、古墳1（310溝）・古墳2（149溝）ともに周溝内からは少量の破片のみで時期を決定付ける遺物は出土していない。しかし、後世の掘削によって古墳盛土が破壊されたことにより緩斜面に遺物が流れ込み埋まったと推測するならば、Y=32760セクションより出土した把手付無蓋高坏等の須恵器が古墳に伴う遺物であった可能性が考えられる。もしそうであれば、6世紀であると考えられていた古墳の時期が5世紀後半にまで下る可能性がある。

報告書抄録

ふりがな	うずまさいせき・うずまさこふんぐん3
書名	太秦遺跡・太秦古墳群Ⅲ
副書名	一般国道168号（枚方大和高田線、天の川磐船線）他道路整備事業に係る上の山遺跡他 埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	（財）大阪府文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第141集
編著者名	六辻 彩香、宮野 淳一、大樂 康宏
編集機関	財団法人 大阪府文化財センター
所在地	〒590-0105 大阪府堺市竹城台3丁21番4号 大阪府教育委員会文化財調査事務所3階 TEL 072(299)8791
発行年月日	2006年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
うずまさいせき 太秦遺跡・ うずまさこふんぐん 太秦古墳群	おおさかふねやがわし 大阪府寝屋川市 うずまさ・うちあげ・くにもりちょう 太秦・打上・国守町	27215	3	34° 45' 15"	135° 38' 43"	2005年7月22日 ～ 2005年10月31日	220㎡	道路建設

所収遺跡名	遺跡種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
太秦遺跡・ 太秦古墳群	散布地 古墳	縄文 ～弥生 古墳時代 ～中世	竪穴住居跡1棟 古墳2基 土坑 ピット群	弥生土器・ 須恵器・石器	

要約	<p>今回の調査では、弥生時代中期のやや不整形な円形の竪穴住居が1棟・土坑・溝・多数のピット、古墳時代後期の周溝が2基、古墳時代後期～古代にかけての溝、近世の土坑・耕作に伴う土手状遺構等を検出した。遺構総数は388を数える。</p> <p>今回竪穴住居が新たに確認されたことにより、太秦遺跡の弥生時代の住居跡群がさらに西側に拡がること判明した。</p>
----	--

写 真 图 版



1. 調査地周辺航空写真（南西から）



2. 調査区航空写真（南東から）



垂直写真 上 1区・下 2区



2. 1区 第2・第3遺構面全景（東半）



1. 1区 第2・第3遺構面全景（西半）

写真図版 4



1. 1区 8溝・149溝(古墳2)・竪穴住居1・9土坑・153土坑



2. 1区 7土坑(南東から)

4. 1区 153土坑断面(西から)



3. 1区 153土坑上層(南西から)

5. 1区 153土坑完掘状況(南西から)



1. 2区 第2遺構面全景（北西から）



2. 2区 第2遺構面全景（南西から）

写真図版 6



1. 1区 第1遺構面土手状遺構（東から）



2. 2区 第1遺構面土手状遺構（東から）

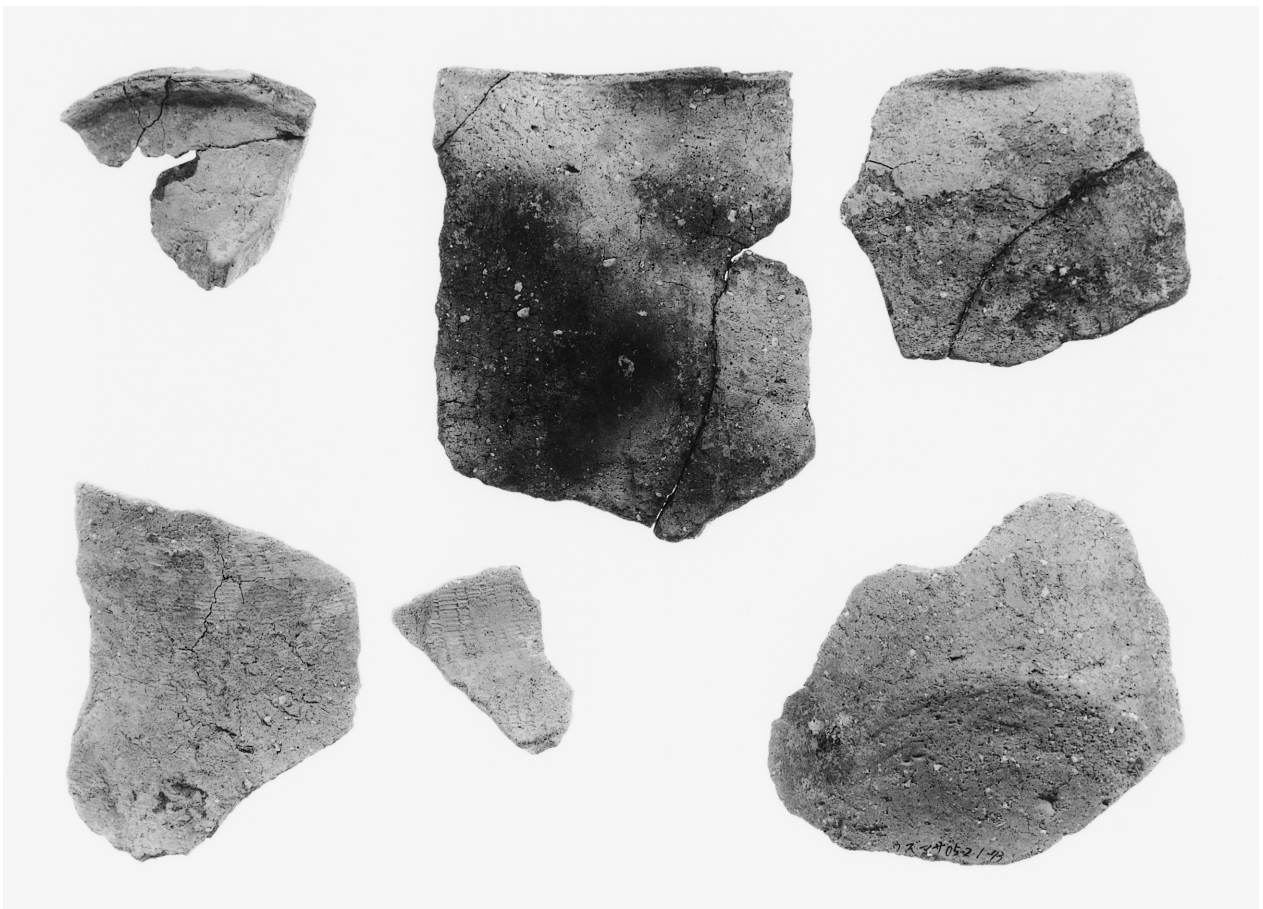


149溝 (古墳 2)

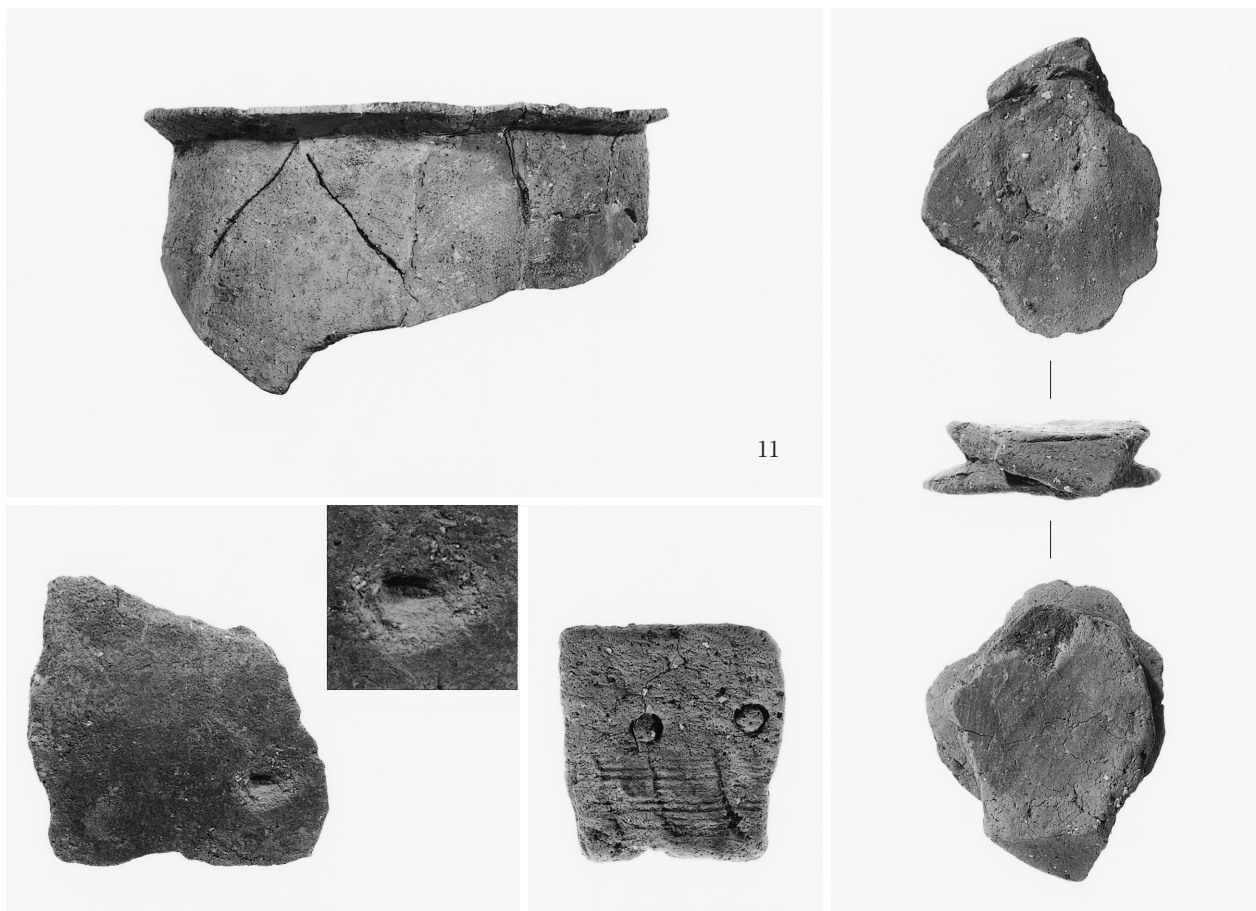
写真図版 8



1. 1区 7土坑 出土遺物



2. 1区 9土坑 出土遺物 (1)

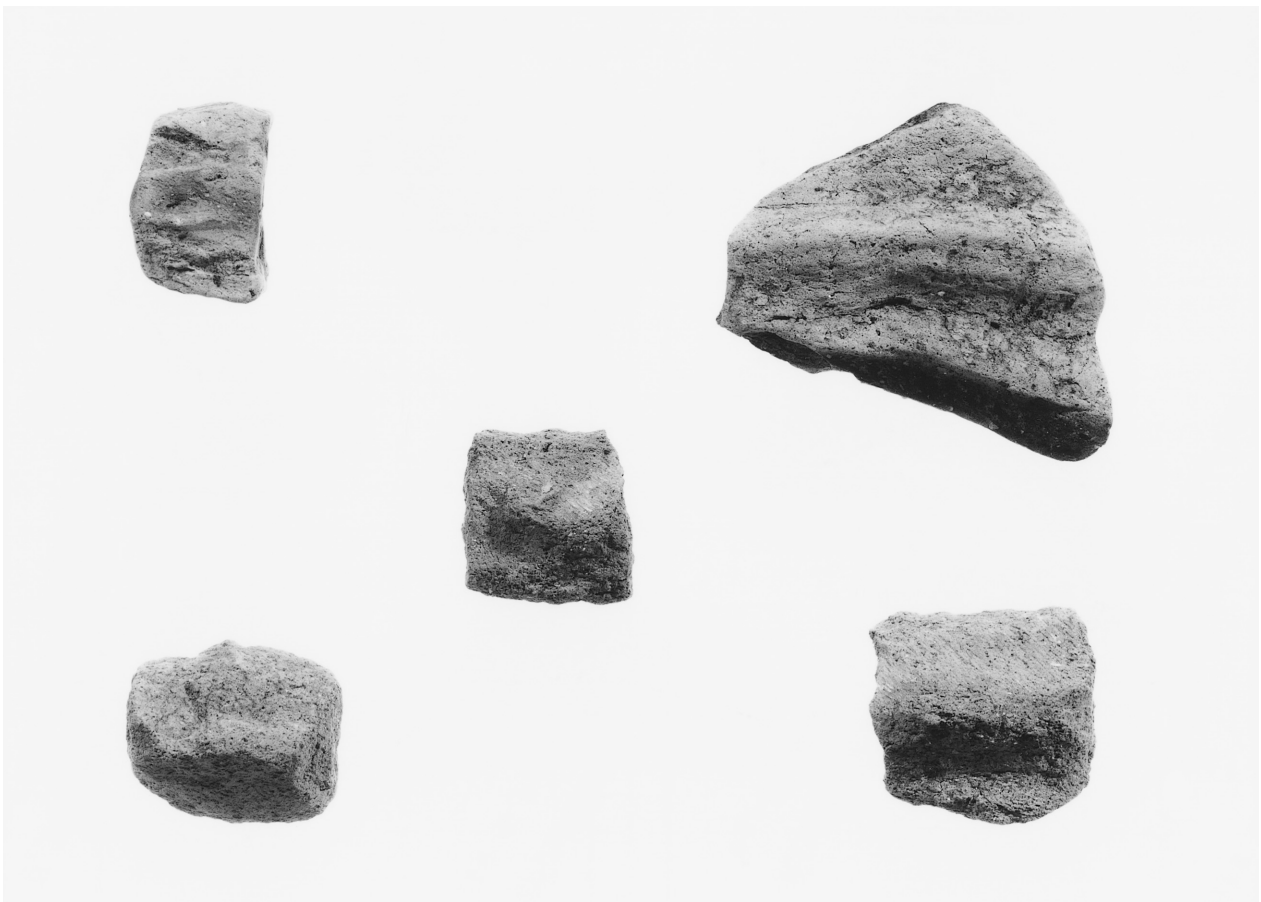
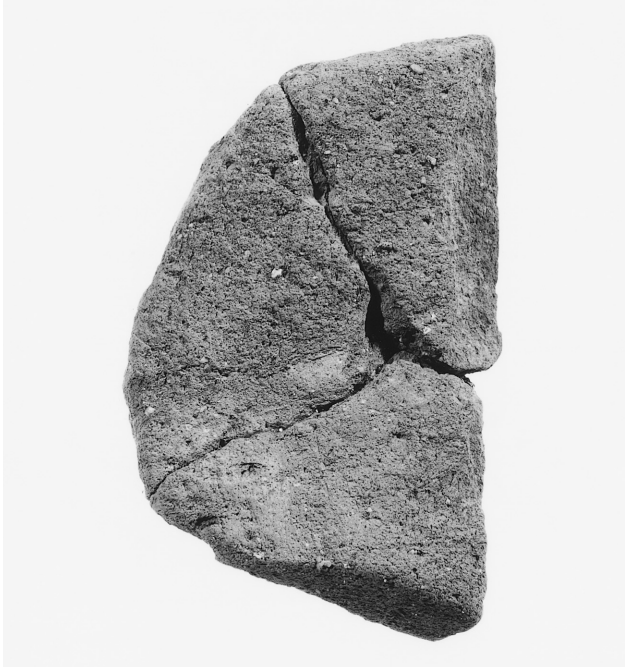


1. 1区 9土坑 出土遺物 (2)

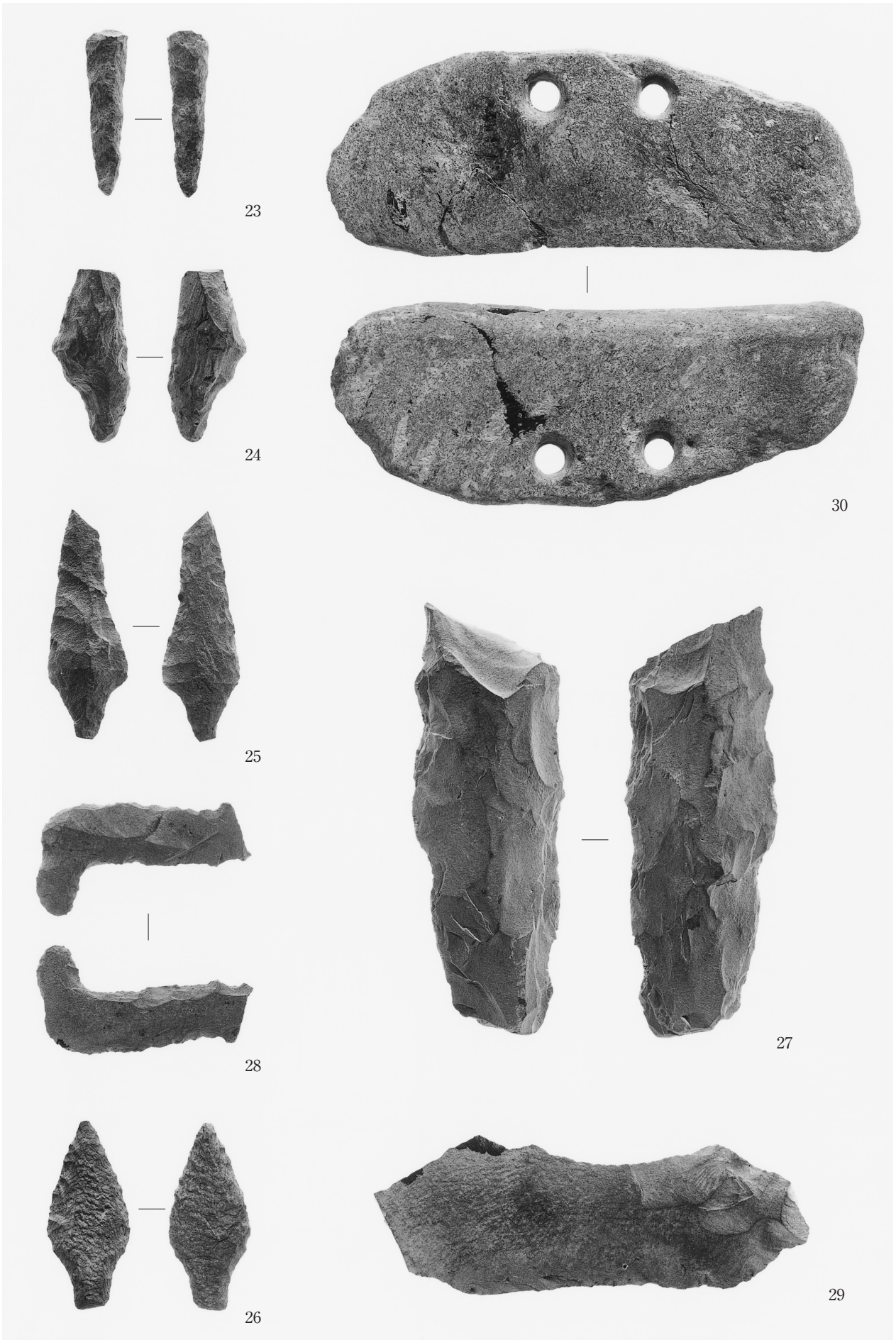


2. 1区 153土坑 出土遺物 (1)

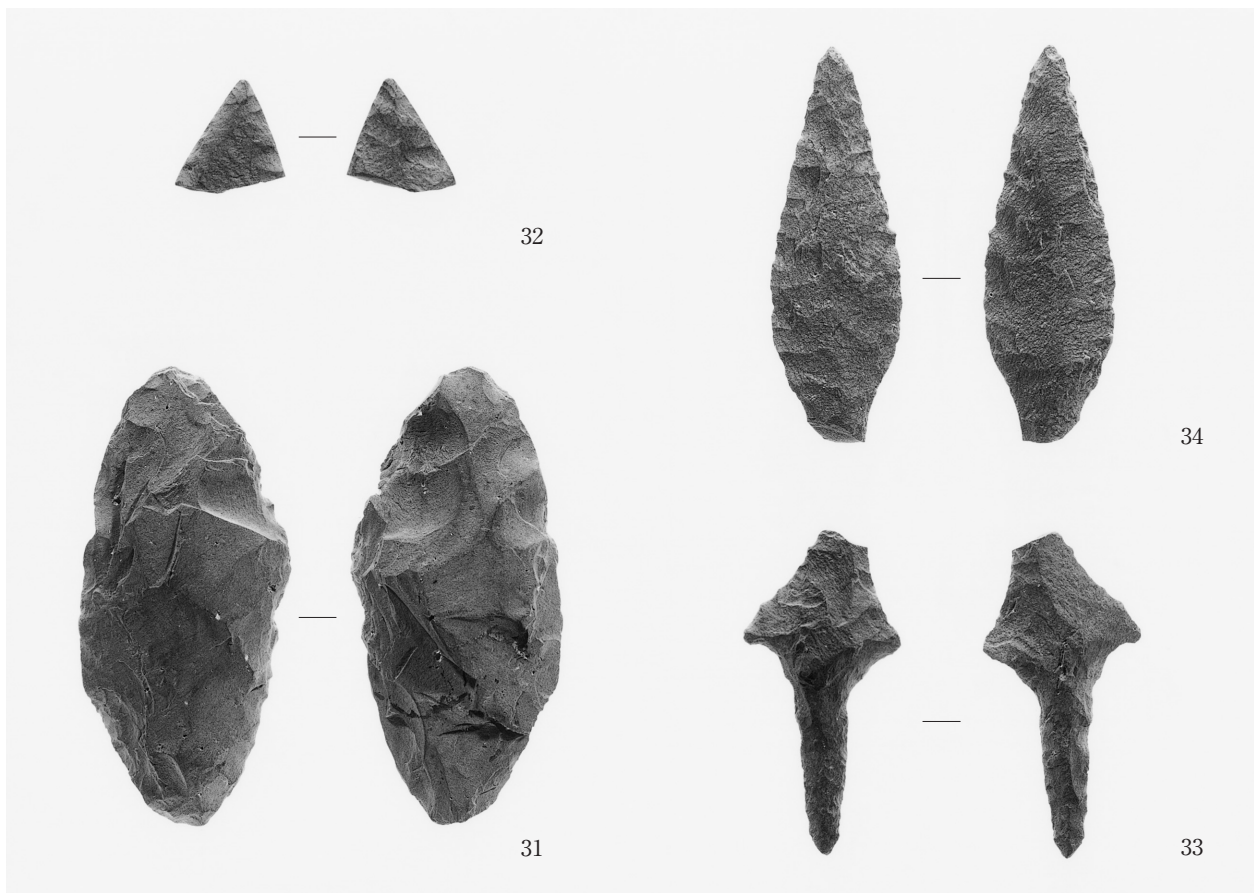




2区 包含層 出土遺物



1区 包含層 出土石器



1. 1区 遺構 出土石器



2. 1区 9土坑 出土烧土塊

(財)大阪府文化財センター調査報告書 第141集

太秦遺跡・太秦古墳群Ⅲ

一般国道168号（枚方大和高田線、天の川磐船線）他
道路整備事業に係る上の山遺跡他埋蔵文化財発掘調査報告書

発行年月日／2006年 3月31日

編集・発行／財団法人 大阪府文化財センター
大阪府堺市竹城台 3丁21番 4号

印刷・製本／株式会社 中島弘文堂印刷所
大阪府大阪市東成区深江南 2丁目 6番 8号

